
雨河くん家の恋愛事情

雲雀骸護

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

雨河くん家の恋愛事情

【Nコード】

N2622T

【作者名】

雲雀骸護

【あらすじ】

これは両親の事故から運命の歯車が回り始めた主人公・雨河孝樹とその周りに集まる人々の高校生活と恋愛とちよつとしたコメディを描いた物語。

すべては『お互いの身に何か起きたときは、その家族を助ける』という親同士がした約束から始まる。

一人になってしまった孝樹の家には色んな人が現れ、住み始める。それはある意味家族のような団結力があつた。

そんな家族の中にも少しずつ違う感情が芽生え始める。

はたして孝樹たちの高校生活は？

はたまたこの雨河家で繰り広げられる恋の行方は？

活動報告に登場人物等の解説があります。

第1話 <別れと出逢い>

雨が降っていた

冷たかったのか、暖かかったのか、全く覚えていない

気付くとそこは公園だった

少年は近くのベンチに腰かけて空を見た。
止むことのない雫が顔をつたう。

それはまるで少年の心のようにだった

<別れと出逢い>

始業式から二日後の朝

「朝だよ、そろそろ起きなさい」と母が一階から呼んでいる。
少年は布団の中から頭を出し、「わかった」と応えた。
少年は布団から出ると制服に着替えて、鞆を持ち、一階に下りて
いった。

「よお、孝樹。やっと起きたか」

朝食をとっている父が孝樹と呼ばれた少年を見て言った。

「あー、おはよう」

孝樹は応えた。父は味噌汁をすすりながら手を挙げた。

孝樹は急いで準備を始めた。

母が「ご飯食べてく？」と聞いてきたが、彼は時間がないと断って大急ぎで二人に行つてくる、と言つて家を出ていった。

ガンツ！！

右の路地をいきなり飛び出してきた人物がいた。

「いつてえ〜！いきなり飛び出すんじゃないよ、吉原」

飛び出したヤツに向かつて叫んだ。

すると、「すまん、すまん」と笑いながらその少年、吉原壮汰は応えた。

二人は立ち上がり泥をはらった。するといきなり、吉原が、そっぴやさ、クラスの人間覚えたか？、と指をまつすぐ孝樹に向け叫んだ。

「少しなら覚えたがな〜」と少しニコニコしながら返した、そして再び学校に向かい歩き出した。

校門に続く坂を歩いていくと聞き覚えのある声があった。

教室に入るといつも通りの賑わいがあった。

その中心にいるのはいつもの人間だった。

そしていつも通りの笑顔がそこにいた。

孝樹は微笑まずにはいられなかった。

「どうしたんだ？雨河」と吉原が不思議そうに隣で聞いた。

「何でもない」と呟き窓側後ろから二番目の自席に座った。

続くように吉原も孝樹の二つ前の自席に座った、そしてすぐに席を立ち、孝樹の隣の席に腰を下ろした。

「さっき笑つてたのは何なんだよ、教えるよー！」と聞いてきた。

「気にする事じゃねーよ」

少し怒り気味に言う。

その時、後ろから飛びつきざまに別の人物が同じことを言った。

「お前に関しては全く関係ない」と言い放つ。

「ひどいよ、雨うち」と軽いノリで言う彼は小田野竜一。

幼馴染みにしてクラスメイト、しかし、かなりのバカなのだ。

「すまないな、孝。そっぴや昨日のテレビ見た？」と竜一を引き離しつつ聞く。

彼の名は一村光介。竜一と同じく幼馴染みのクラスメイトだ。

しかし成績はそこそ良い。

「昨日は見てないな」

「あつ、オレ見た。洞窟探検のヤツだろ？」

「そう、やっぱり吉原は見たよな。小田野は見た？」

「んにゃ、オレはメルしかしてないかな」

「そうか。いや、ホント面白かったのに」

「そつだぞー、おまえたち」と吉原は回転をする。

「お前高校生でする事じゃねーぞ、それ」と立ち上がりながら孝樹は親友に言った。

「心はいつでも中二だよ、イエーイ」と親友の忠告も無視で教室内を走り回り、他のクラスメイトの会議を邪魔しながら何か呟いている。

「ガリオも相変わらず変なヤツだよな」

たった今教室に入ってきた女子が孝樹たちの方を向いて言った。

「オッス、佐能」と三人が息を揃えて言う。

その短い会話の間に教室を二周してきた吉原が息を切らせつつ、

「おはよう、佐能。昨日の洞窟探検見たか？」

「見、見てない」と言いそそくさと自席に去っていった。

その時、勢いよく前の扉を開けて入ってくる生徒がいた。

その人物を見たガリオこと吉原が走っていき、

「おはよう、千摩」

と話しかけた。がしかし、吉原は手を挙げたまま足を滑らし、顔面から床に激突。

そのまま二つの机を倒しながら静止。

その場にいた全員が呆気にとられる中、当の本人はいたってマイペース

周りの状況など気にすることもなく、再び手を挙げ、

「改めて、おはよう、千摩！」と言った。

「おはよう、吉原君」と千摩は少し恥ずかしがりながら言った。少し離れた所にいた一村が言った。

「やっぱりアレってさ、千摩が吉原を好きってことなんかね？」

それに答えるように頷きながら

「そりゃそうなんだよ。見ればわかるじゃんか」と小田野が言う。

「だよなー、明らかだもんな」とため息をつきつつ孝樹は言った。

「あれー、もしかして雨河君って千摩さんの事好きなの？」

いつの間にか隣にいた佐能が孝樹の耳元でささやいた。

「そんなんじゃないよ」と赤面して言った。

「ごめん、ごめん」と佐能は手を振って友人の所へ行った。

その時、扉を開けてものすごい剣幕で入ってきたのはこの23の担任でつい最近彼氏にフラれたばかりの阿波秦南であった。

「はい、みなさん着席するよーにー」とかなり明るい声を出し、未だ中学生ではないのかと思える程の見た目で、その容姿とぴったりに合う声で自分の生徒たちに言った。

とても28歳とは思えぬ中学生のような行動をしながら…。

なにやらくねくねしている先生に手を挙げ、発言を求めるものがあった。

ガリオである。(ちなみに、ガリオとは「ガリ勉・少しガリガリ・寿司を食べに行く」と必ずはじめにガリを食べる男」という意味であ

る)

「今から何するんですか？」と先生が何をするのか話す前に発言した。

その時、クラスにいたKYガリオ以外の全ての人間が心の中で、それを今から話すんじゃないか、と思っただのは言うまでもない。

そして2分程の沈黙の後、担任の阿波が口を開く。

「とりあえず、今日はクラス役員と係を決めよう。まずは室長と副室長を決めたいと思います」

その時、担任が言い終える前に電光石火のごとく自席に直立不動。そして手をこれでもかという程挙げている生徒が1名いた。

自ずと知れたKY野郎、吉原壮汰であった。

「どうかしたの？えーと、吉原くん？」

「オレに、オレに室長をやらせてくださああああいいいい！！」

怒号のごとき叫び声をあげる。クラス中が驚くなか、なぜか冷静な担任は

「それじゃあ、他にやりたい人います？」と言った。だがクラスに

あの気迫を負かせる程の人間はいない。

親友の孝樹ですら呆然としているのだから…

「他にいないみたいだから、室長は吉原くんにケツテー(笑)」

担任が子供全開で決定事項を言う。28歳だと言っのに…

「それでは、室長も決まったのでこの続きは室長さんにお任せします」

と担任が隅によけ、かわりに新室長こと吉原が教卓の所へ行く。

そして教卓をドンツ！と力強く叩き、

「それでは次に、副室長を決めたいと思う。誰か立候補する者はいるか」と言い、誰かが手を挙げるのを待った。しかし手を挙げる者はいなかった

「えーと、いないならオレが指名しよう。雨河、副室長をやらぬい

か？」

まさかの指名に驚き、思わず立ち上がる。

「何でオレだよ！他のヤツでも良いだろ」

「いやー、お前ならそこそこしっかりしてるから良いんじゃないかなーと」

すると周りからも、そうだそうだ的な意見が出始め、わかったよ、と折れた。

役員が決まり、吉原は席に戻り、再び阿波が前に立つ。そして係を決めて、その日の授業を受けた。

6限のチャイムが鳴り始めた時、放送が入った

「2年3組の雨河孝樹君、至急職員室に来てください」

「呼んでるぞ？至急だつてよ」

一村が言う。

「だな。ちよつと行ってくるわ」と言つて職員室に向かう職員室に入ると担任の阿波秦南が急いでやってきた。顔は青ざめていた。

「どうしたんですか？」と尋ねると、

「ご両親が事故に遭われたの、病院まで送るわ」と言った。

その時、彼は頭が真っ白になっていくのが分かった、そして周りの全てのものが自分から遠退き、一人で暗闇に立っているような感じがした。

車に乗り、病院へ向かう中、彼はずっと黙っていた。自分でも何が起きているのか全く分からないのだ。

「きつと大丈夫よ」と秦南が励ましてはくれるものの、当の秦南自身、不安でいっぱいなのは明白だった。

そしてまた沈黙が訪れたのであった。

病院に着くと外で警官が立っていて、呼ぶので中に入つていった。

その晩、彼は一人で家にいた。電気もつけず、暗闇の中、涙を流

していた。心は空になり、全てを無くしたような感じになっているのだ。そして、これからどうしたら良いのかを少しずつ考えてもいるのだが、全く浮かばないのであった。

そうしていつの間にか日は昇り、朝をむかえていた。

その日は学校を休み、家にいたのだが、その時玄関のベルがなかった。それは10分程続いても止まることはなかった。出る気にはなれなかった彼ではあったがあまりのしつこさにイライラしながら玄関の扉を開けた。

そこには中年の男性が立っていた

「君が孝樹君かな？」とその男性が聞いた

「そうですね、どちら様？」と尋ねると

「私の名前は千摩春助と言います。あなたのお父さんの友人です。というか、君のご両親と私と私の妻は中学・高校の友人同士です。すぐく仲がよかったですよ。それでその当時あることを約束しまして、『お互いの身に何か起きたときは、その家族を助ける』というもので、そして起きてしまった」

春助という男性は顔を背けた。孝樹には泣いているのだとわかった。少し間があき、彼は言った。

「そこのだが、どうだろう、私の家で一緒に暮らさないかな？」

孝樹の頭には複数の疑問が浮かんでくる。

とりあえず基本的な質問を試してみることにした

「どうしてあなたが信用できると言えるんですか？」

彼は少し驚いた顔をしたがすぐにもとに戻り、

「すまなかった。そりゃ信用できないよな」と言うとポケットから手帳を取り出すと中を開いてかざした。そこには孝樹の両親、そして彼と見知らぬ女性が一人写っていた

「これは君の両親と私たち夫婦の写真なんだ」と言った

「どうやら信用しても良さそうですね」

「ありがとう」

そして二人はしばらく話し合った。

第2話 <同棲 乱々と来る>

<同棲 乱々と来る>

孝樹は自分の部屋のベッドで考え事をしていた。

二時間ほど前に起きた出来事についてだ。

「どうしたものかなあ」一人呟く。

ある男性が訪ねてきて、いろいろあって一緒に暮らそうと言ってきたのだ。

なんでも彼は父の友人で、自分を引き取りたいと言っただ。

未だよく分からないまま眠りについてしまった。

翌朝目が覚めると電話が鳴っているのに気がついた。

電話に出てみると、

「おはよう、孝樹君。朝からすまないが、君、どこの高校かな？」

「春倉高校ですけど」と言うのと驚きと喜びの入りまじった声で、

「そうか、私の娘と同じ高校なのか。素晴らしいことだ。教えてくれてありがとう、それではまた」と言っただけで彼は電話を切った。

孝樹は思った、 - 娘と同じ高校？そして名前はたしか、千摩… -

彼は気づいた。

あの男性はクラスメイトの千摩優華の父親であることに。

そして彼はとりあえず高校に向かうことに決めた。

歩いていると後ろから一村と小田野が走ってくるのが分かった

そこにはいつもの友人がいるのだった。

「オッス、孝」

「おはー、雨っちー」と二人は声を合わせて言う。

「オッス、小田野、一村」と手を挙げる。

「話は秦ちゃんから聞いたよ」といつものゆるい声の中にも、悲しみのまじった声で言った。その後を引き継ぐように、

「色々と大変だったな、オレらで力になれる事があつたら何でも言ってくれよ」

孝樹は少し涙を流した、こんなに良い奴らがいるんだ、と。

教室に入ると、皆が明るく接してくれた。そして授業がいつも通り始まり、終わっていった

帰り際、ある女子から呼び止められた、千摩であった。

「今日、お父さんから『話をしたいから家に連れてきてくれ』って言われたんだけど、今から良いかな？」と言った。

孝樹は頷き、彼女の家についていった。

「よく来てくれたねー、待っていたよ」と春助は言った。

「いらっしやい」と彼のとなりの見知らぬ女性が言った。

いや、一度だけ見たことがあった。それは春助と名乗ったこの男が初めて家に訪れたときに見せた写真に写っていたのだ

「どうもよろしく願います」と二人に頭を下げると、客間に案内された。

客間はかなり広かった。外見もかなり豪華であったが、中もかなりのものだ。

壁には名画とも思しき品々が掛けてあり、他に騎士像のようなものも置いてあったりした。

椅子に座り、孝樹は春助に聞いた

「やっぱりかなりのお金持ちなんですね。うちとは大違いです」
それを聞き、大笑いしながら、

「そんなことはないさ。元々君の御両親のおかげなのだから」

「それは一体どういことですか？」

「元々君のお父さんが立ち上げた会社なんだよ、うちの社は。そして君の両親が私たちに会社を譲ってくれたんだ」

衝撃事実の発覚であった。

そしてそれから二時間近く、三人は話し続けた。

日はとうに落ちて、空には無数の星が散らばっている。

「もうこんな時間か。話をしていると時が経つのを忘れてしまうな。孝樹君、一緒に食事でもどうかかな？」と時計を見ながら聞く。

「良いですか？」と聞き返すと

「当たり前だよ」と笑ってくれた。

食事を終えて帰ろうとした時、

「一度考えてみたまえ」と彼は言った。

「ありがとうございます」と頭を下げて帰路につくと、後ろから追いかけてくる者がいた、千摩優華であった。

「あんた、足っ…早っ…いわよ」かなり息をきらせながら言う

「すまん、でもどうしたん？」

「お父さんが孝樹の所に泊まりに行けって言ったのよ」

「あー、そうなの……」

沈黙が流れる。

家に着くと彼女は一目散にテレビの前に陣取った

「俺、風呂入るから」と言ったら彼女は手を挙げて

「ハイハイ」とテレビから目を離さず言う。

彼は風呂に向かいながら思った・何でこんなことに？・と。

そして彼が風呂から上がると、テレビの前から寝息が聞こえる。

思わず「寝てんのかよ」と言ってしまったのだった。

「おい、起きて風呂入ってから寝ろよ」と起こす。

「んにゃ？ここどこ？いまなに？」と寝ぼけている。

「ここは俺ん家で今10時だ」

「ああ、そうか。泊まりに来てたんだった。10時？もうそんな時間かよ。もつと早く起こしてよね！」となぜか起こる。

「しゃーねーだろ。さっきまで風呂入ってたんだからよ」と言うと、

「あつそ、んじやお風呂入る」と言っ駆け出していった。

そこで孝樹は思った。

そう言えば、あいつの寝るスペースとか作らねーと。

そこで彼は二階に上がり、自分の部屋の隣の空き部屋を片付け始めた。

若干荷物置き場と化した部屋を片付けるのは困難だったが、とりあえず全てを一階の両親の部屋に押し込むので手を打った。

全てを入れ終えて、掃除をし、使えるようになった頃、彼女が現れた。

孝樹を見つけると少しムツツリ顔をして自分の姿を棚に上げて

「ちょっとあんたこんな所で何してんのよ」と言った。

彼はそんな事を言う彼女に対してこう言い返したかった - おまえこそ何してんだ、その姿は何なんだ - と

しかし彼はそれが言えないのだ。

「何って、おまえが寝る部屋用意してんじゃん」と代わりに答えた。

「ふん。私ここで寝るの?」

「そう。下でテレビでも見てな、すぐピカピカにするから」

「分かった」と言って彼女は下りていった。

そして彼はひたすら片付けに勤しんだ

時間は0時を五分程過ぎたところだった

部屋を片付け終えた孝樹がリビングに下りていくとそこには電気もテレビもつけっぱなしで寝ている優華がいた。

「おい、何寝てんだって、起きろよ」と彼女を揺する。

しかし彼女は全く起きない。

それでも彼は全く起きない。

それでも彼は諦めず、起こし続ける。

「うっ、うっ、誰よ、良い夢みれらのに」と欠伸と伸びをしてうっすらと目を開けた。

「ようやくかよ。起きろって、部屋片付けてやったから」と言った時、

「あんた何で上から目線なのよ、ちょっとおかしくない?」と立ち上がり、歩み寄ってくる

「そっそんなことねーよ」と目を背ける。

彼は思ったのだ。

- 思った以上にコイツ可愛いかもしれない - と。
しかし、そこで思い直す、俺には想い人がいる。と
もちろんこの目の前にいる少女ではない。当然だが。その想い人
は同じクラスにいる。

いつも明るく、美しく、全てが素晴らしい。

「ちょっと何ニヤけてんのよ」と目の前にいた優華が言う。

彼は慌てて「何でもない」と答えて、

「いいから今日はもう寝るぞ」と言う。

「そうね、そうしよう」と彼女が納得してくれたので孝樹は優華を
連れて二階に上がっていく。

「俺は自分の部屋で寝るから、おまえはこっちな」

「はいはい」と言って入って言った。

孝樹は自室に入り、ベッドにドカッと腰を下ろした。

そして徐に音楽プレーヤーの電源を入れ、同居人のことを配慮し
てイヤホンを使いお気に入りの曲を聞き始めた。

彼はそのまま深い眠りへと落ちていった。

目を覚ますと朝になっていた。

時刻は七時、学校に登校するまで一時間はある。

彼は隣の部屋で寝ているであろう同居人・千摩優華を起こすため、
彼女の部屋の扉の前に立った。

少々躊躇いつつ、扉をノックする。返事はない。

ちよつと強くノックしてみた。それでも返事はない。

今度は呼んでみたが、やはり返事はない。

迷ったあげくに彼は中に入ることに決めた。しかしやはり躊躇う。何と言つても相手は女子なのだ。当たり前だ。

しかしこうしている間に時間は過ぎていく。

彼は思い切つて扉を開きベッドに近づいた。

そこには人形のように眠っている優華がいた。

孝樹は彼女を揺すつて起こした。

昨夜のようにまた寝ぼけていた

「もう食べれにやいよー、でもまだた…べ…?」

ようやく目を覚ましたらしい、真つ直ぐ孝樹を見つめて一つずつ頭の中の疑問を取り除いているようだ。

「大丈夫か?」と孝樹が聞くと

「大丈夫。それより今何時?お腹空いた、ごはん食べたい」と言つた。

「今は七時十五分だよ。ところで何食べたい?」と聞くと目を輝かせて

「何でも作れるの?」と聞いた。

「何でもつてわけにはいかないけど、少し位なら料理できるよ。他にも一応家事とかもできる」と言つと

「じゃあじゃあチャーハン食べたい!!」と満面の笑顔で言った。
なぜか孝樹も嬉しくて堪らなくなり、

「任せろ！腕によりをかけるぜ」と言っつて、台所に駆け出した。
それから十分間、孝樹は心を無にしてひたすらチャーハン作りに
励んだ。

その間に優華も完全に目を覚まし、着替えて髪をとかしていた。
彼女は髪がとも長くて、とかすだけで十分の大半を費やしてい
た。

とき終えるのと同時くらいに孝樹作のチャーハンが机に置かれた。
その香りにつられてリビングの椅子に座っていた優華が猛スピード
で向かってきた。

彼女は机にしまつてあつた椅子を引つ張り、腰をかけて

「ねえ、食べていい？」と聞いた。

「どうぞ、召し上がれ」と言っつと、彼女はものすごい速さで食べ始
めた。

こつこつ姿を見ると作った甲斐があると孝樹は嬉しくて堪らなく
なつた。

食べ終えたのを見て、「どうだった？」と聞くと

「すごく美味しかった。うちのシェフより美味しかったかも」と笑
顔を見せる。

孝樹はすごく幸福な気持ちになつた、しかし不意に優華が「そう
言えば今何時？」と言っつ。

孝樹は部屋にある時計を見た。

気づかない内に八時十五分となっていた。

「やばっ！早く準備しないと遅刻しちゃう」

「うそっ！早く早く」

二人は慌てて準備をして学校に向かった

二人はほぼ同時に教室に飛び込んだ。

まだ担任は来ていなかった。

「おっ、ギリギリセーフだったな」と吉原が言った

「てか、何で二人一緒に入ってきたの？」と佐能が疑いの目を向ける
二人は声を合わせて「たまたまそこで会って」と言った。

そして自分たちの席へ向かう。

席に着くのと同時に担任の阿波が入ってきた。

室長となつた吉原が号令をかけ、担任が話し始める。

「今日は何とうちのクラスに転校生が来ました」と。
一瞬、クラス中が押し黙る。そして口々に

「転校生だつてー、女子かなー」

「いやだー、イケメンの方が良いよー」

「友達になれるかなー」

「人外と仲良くなりたいなー」など

教室中をさまざま意見が飛び交っていた。

そして戸を開け、入ってきたのは美人と言っても過言ではないだ

るう女子だった。

クラス中が一息に盛り上がる。

男子だけではなく、女子まで騒いでいる。

そして注目の的となつてゐる彼女は黒板の方を向き『芳野坂紗美』と書いた。

みんなが拍手をして席をどこにするかという話になつた。

「でも空いてるの雨河君の後ろしかないけどあそこで良い？」と担任ことロリっぽさ全開の阿波が言う。

その時、紗美の顔が輝いてきた

「雨河君って、雨河孝樹くん？」と担任に尋ねる。

「そつだよ？それがどうかしました？」

そこで彼女はザツと手を挙げ、「彼の後ろの席が良いです」と言つた。

そしてすたすと早足で目的の席まで行く。

クラス中は顔から疑問という二文字を浮かび上がらせている。

一部からは「何で彼女が雨河のこと知ってんの？」「や」「俺のこと知らないかな」とか思い思いの言葉を発する。

当の二人はというと、

「久しぶり。私のこと覚えてくれてる？」

「え？ごめん、覚えていないんだけど、どこかで会つたことある？」

「ひどいよー、幼なじみじゃない」

「マジ？全然覚えがないけど」

「小学校の三年生までご近所だったんだよ?」と言う
彼は頭の中を探した、そして一つの答えを導き出した。

「まさか、俺に『さみゆー』と呼ばせ続けた、紗美?」と体を後ろ
に向けて聞いた。

「正解っ」ととても嬉しそうに笑っている。

孝樹は思った。

今後の学校が大変なものになるのか、と。

第3話 <幼馴染みのワガママ>

幼なじみとの再会を果たし、早一週間が経った。

孝樹はとても疲れていた。

何故なら、学校にいる間は紗美が後ろから常に話しかけてくる。そして家に帰れば同居人の優華から色々な命令を受けるからだ。今日、また雑用をするのかと思いつながら荷物を片づけていると

「よっ、孝ちゃん」と横から紗美が顔を覗かせる。

「どうかした？」とそちらを向きながら聞くと、

「今日、家に遊びに行っても良いかな？」と言う。

孝樹は焦った。

家に帰れば優華がいる。これは実にまずい状況である。

ただでさえ、一つ屋根の下男女二人きりというピンチに、クラスメイトにそれがバレる。

それは何かとまずいことになる。

そこで「ごめん、ちょっと用があるから無理だ」と言うと、彼女は耳元で

「良いのかなー、そんなこと言って。孝ちゃんのヒミツ皆にバラしちゃうゾ?」と言う。

「ヒミツって何かな？俺にはわからないなー」一気に体温が下がっ

ていく。

「両親亡くなつて一人暮らしになつたはずなのにあの女子は？たしかこのクラスの千摩優華さんだつたような……」

彼はビクツとした。何故その事がバレたのだろう、尾行されたのだろうかと心で考える。

彼女は耳元から離れて「孝ちゃんのことなら何でもわかるんだからね」と言い、

「早くお家に行こうよ」と言つて歩き出した。バれてしまつては仕方がないと思い、言うことを聞くことにした孝樹であつた。

家に着くとまだ優華は帰宅していなかつた。

孝樹はホツとした。

もしここに彼女がいたら、一体どんなことになつていただろうか。鍵を開けて中に入り、紗美が待ちかまえているので入れた。

「おじゃましてーす」と大きな声で言う、しかし何も起こらない。

「なんだ、いないんだ」と悲しげに言うが顔はどんどん喜びに満ち溢れ出す。

そして彼女は真つ直ぐリビングに向かつた。

まるで家の中を知りつくしているように椅子に座つたので孝樹も向かいの椅子に座ると、

「今度は孝ちゃん部屋行こうよ」と言つた。

「なんで俺の部屋に連れていかなきゃならないんだよ」

「良いじゃん、それじゃ一人で引っっちゃお」と言って歩き出す。

それを孝樹は慌てて追いかけた。

紗美は間違えずに真っ直ぐ孝樹の部屋へと向かう、そして中に入っ
っていった。

一見して「相変わらずきれいに片づいてるね」と言う。

孝樹は心の中で叫んだ・待て待て、俺は一度も部屋どころか家
だっであげたことがないのに何で知ってるの・と。

そう心の中で叫んでいる内に紗美はD I V E T O B E D す
る。

「お前何してんだよ、人のベッドにさ」

「とくに何も？ところで優華さんとはどういう関係なの？」と聞か
れた

「親の友人の娘で、俺はあいつの両親に世話になってる」と答えた

「それなら優華さんとはとくに関係ないんだよね？」

「そう、何も無い」

「それじゃあ」とベッドから体を起こし、姿勢を正して真っ正面か
ら見つめ合う。

「私と付き合っつてよ」と言った。

孝樹は頭の中が真っ白になっていくのが分かった。彼女は言葉を続ける

「昔した約束忘れてないよね？10年前にした」と
そこで彼は思い出した、その約束を…

「確かにしたけど、あの約束は守れない」

「どうして？」と聞く目には少し涙がうかがえた
その答えを探している時、玄関が開く音が聞こえ、

「ただいま、孝樹帰ってんの？」と一階から聞こえた
とつとつ優華が帰宅してしまったのだ

その音を聞いた紗美は荷物を持ち、部屋を出かけて振り返り、

「私はまだ諦めてないから、これからもヨロシクね」と笑顔で出て
いった

そして一階から怒鳴り声が聞こえ、続いて玄関が閉まり、階段を
駆け上がる音がした。

「ちょっとあんた何女子連れ込んでんの…」と優華が入ってきてボ
コボコにされた。

時刻は午後九時である。

俺こと雨河孝樹は理不尽な理由でボコボコにされた仕返しに、宿
敵（今回の一件だけだが）、千摩優華を攻撃したいと思う。

現在彼女は入浴中である

しかし、男としてそこを襲撃するのはさすがにできない。

なので入浴後を少しずつ精神的に攻めることにした。
トラップを全部で三つ用意した。

そしてその時は来た。

彼女がお風呂から上がったのであった。

「ギャギャー」と悲鳴が聞こえる。彼は自分の一つ目の罠が成功してガッツポーズをした。

一つ目の罠「ネバネバ地獄」であった

そして続けざまに悲鳴が続く。

二つ目の罠「ビチャビチャ地獄」

彼女の息が荒くなるのが聞こえてくる。しかし、彼女は真っ直ぐに冷蔵庫へ向かう

なぜならいつも風呂上がりにはジュースを飲む癖があるから。

そこで三つ目の罠「カラカラ地獄」発動

つまりは、一つ目の罠で風呂上がりの彼女の足を蜂蜜でネババにして、二つ目の罠で着る服に水をかけ、三つ目の罠でジュースを醤油と入れ替えるというものであった。

まるで中学生のイタズラとも思える

彼女は慌てて水を飲んだ。

そして疾風が如く自分の部屋に行き、疾風が如く彼の前に現れた。

「何すんのおよ！色々死ぬかと思っただわ」と激怒する。

「さっきのお返しだ」とこちらも激怒する。

「だからって私の部屋汚さなくても良いじゃない」

「えっ…ちょっと待て、俺はお前の部屋にはなにもしてねえ」

しばし沈黙。さらにひやりと二人は冷や汗をかく。

「なっ…なににも…してない？」

彼は何度も頷く。実際、何もしていないのだから。

「ギャー」「わぁー」と同時に叫ぶ

「とりあえず落ち着こう」と孝樹は水を一杯飲み

「よし、今日は寝よう。もしかしたら明日には元通りかもしれないから」と言い、自分の部屋に向かおうと歩き出した。

すると、

「私はどうしたら良いのよ」と若干涙目で聞く

「寝れば良いじゃん」

「ちょっと、あんな何が起きたのか分かんない部屋で私に寝ろって

言っわけ？」「と言っ。

「お前、怖いの？」「とニヤリ

「バツバカなこと言わないで」「と言いつつ震える

「んじゃどうしたいわけ？」「

「仕方ないわね。一緒に寝てあげる」と言っ孝樹の部屋に駆け込む。

「マジかよ」と呟き追いかける。

部屋に入るとすでに布団に潜っていた、ど真ん中に。

「俺の寝る場所がねーじゃねーか」と激怒、というかつっこむ。

「もう、一緒に寝させてあげるわよ」と少し奥にずれた。

「俺の布団なのに…」と呟きつつも何も言えない孝樹であった。

翌朝、窓から差し込む陽の光で目が覚めた

彼は手早く朝食の支度を済ませ、彼女を起こしに行った。

いつものように寝起きは悪かったが、支度をさせる事に成功し、朝食も済ませて学校に向かう。

歩くなか、彼の心はひどく落ち込んでいたのであった。

何故なら、昨日厄介な事に巻き込まれたからだ。

おもわず息が漏れてしまっ、そこに横から「何ため息ついてんのよ」と言われた。

彼は思った・誰の、誰のせいでこんなに病んでると思っただと。

当然口に出せるわけもないのだが……。

そんな二人を他所に教室では……

証言者その1：Y君

「最近あの二人、一緒に登下校してることがあるのだ。でも一緒にいても何かいつも言い争いとかしているのだよ。よく分からないよな」。ところでどう？この上腕二等筋、すごくね？日頃からやってる腕立て伏せの賜物だぞ」

証言者その2：Mさん

「雨河くんと千摩さん？最近よく一緒にいることについて？そーね。そーだ、前に一度一緒にスーパーにいますとこ目撃したよ？でも付き合ってるとかそんな感じじゃなかったけどな」

証言者その3：I君

「最近の孝について？そういえばよく千摩と一緒にいるな。でも見ると時々犬猿の仲のような空気になることあったな。あと、聞いた話だがいっすら一緒に暮らしてるらしいよ？」

などなど、たくさんの噂や情報が飛び交っていた。

そんな時に二人が一緒に入ってきたので教室中が騒がしくなる。しかし、空気を気にする風もなく二人はそれぞれの席に向かう。席に着いた孝樹のところに壮汰が全速力で近づいていく。

「雨河、お前ってさ千摩と付き合っているのか？」と小声で呟く。

「俺が？まさか、そんなわけないじゃん」と軽く手を振る。

そこへ一村と小田野もやってきて「目撃情報があるんだぞ」と声を揃えて言った。

「付き合ってねえーもんはねえーんだって」

「だがしかし、一緒に買い物したりしてるとこ見られてるんだぞ？」

「いや、それは確かだけど、ちょっと違うから」と困りながら言う。

そしてそれから阿波ちゃん（担任）が来るまで孝樹はクラスメイトの誤解を解くのに時間を費やした。

そんな姿を自分の席に座り、眺めている紗美はため息をついた。

「そろそろホームルーム始めるよ」といつもの子供っぽい声が聞こえる。阿波ちゃんだ。

ホームルームの中、それぞれに思うところがある皆なのであった。

授業が終わり、教室には孝樹以外に誰もいない。

彼が残っている理由、それは阿波ちゃんから、「教室のポスター貼り替えてもらえる？」と頼まれたからだ。

人の頼みを基本断れない彼は当然それを受けたのだった。

全てを貼り終えた時、すでに時刻は五時だった。

早く帰宅しないと優華に何されるかと思っていると、どこからともなく、

「ちょっと話があるんだけど」と声をかけられた。

彼は慌てて周りを見回した。すると、席に一人だけ座っているのに気がついた。

芳野坂　紗美であった。

「今日は何の話だよ」と彼は少し苛立ちながら聞いた。

「今あの人に二人で暮らしてるんだよね？」

「そうだけど」とそれに答えると、

「もし良かったら私も一緒に住んで良い？」と言った。

おもわず、「えっ？」と口から漏れてしまう。

孝樹の頭の中は処理しきれないコンピュータのように一時停止する。

しばらくして、それから回復した彼の頭では何が起きたのか少しずつ処理し始めた。

今確かに『俺の家に住む』と言ったと彼は結果を思い出す。

「俺の家に住むの？」と聞き返す。

「そう。言ったでしょ？諦めないって。だから一緒に住むことにした」と決意表明のように力強く言う。

「でも優華にも聞いてみないと」

「何で？良いじゃん別に彼女じゃないんだから」と言っって孝樹の手

を握り走り出す。

孝樹は内心とても不安でいっぱいだった

「ところで万が一にも俺の家に住むとしていつから住む気だよ」と彼は走りながら聞くと

「そーだなー、今日から」と満面の笑顔で言った。

「はいっ！？今日からだど？無茶言つなよ、優華に何て言えば良いんだよ」と焦る。

「大丈夫！私が説明するから」と胸を叩き自信満々だ。

孝樹はどんどん体から血の気が引いていくのがわかった。

玄関に着くと手が自然と震えだしていた。

当たり前だろう。今からどんな恐怖が待つのかを考えると誰でも震えてしまうはずだ。

そんな孝樹とは裏腹に、やけに楽しそうな紗美が、「ねー、早く入ろうよー。疲れちゃったよ」と言う。

そして震えてガタガタしている孝樹の手に自分の手を添えて「さあ、早く」と鍵を回す。

ついに扉が開いてしまった。

中ではどうやらそこそこ気に入っている笑点を見ているようで、笑い声が玄関まで聞こえてくる。

「たったただいま」と中に入ると、遠くの方から「お帰り、遅かった

じゃないの」とかえってきた。

「ああ、そのー少し問題が発生して…」と言つと、

「問題？めんどくさいもん連れてきてんじゃないでしょうね？」と怒鳴っているのが聞こえた。

孝樹は震えだす、さっきよりも一層強く。

しかし、意図的なのか、空気を読まないのか、彼の隣に立つ彼女は平然と、

「こんばんは、千摩さん」とにこやかに言った。

奥からは「はっ？誰？」と慌てて玄関に近づく音が聞こえる。

そして二人はこの家で再会した。いや、正しく言うなら“してしまつた”の方かもしれない。

孝樹は二人の後ろにただ者ではないオーラが漂っている。

優華の後ろには赤くてまさに強者と思わせる“虎”が現れた気がした。

逆に紗美の後ろには青くて可愛い“猫”が現れた気がした。

・えっ？虎対猫？何か知らないけど、勝負する前から決まってるかい？・孝樹は震えながら思っていた。

しかし、そんな恐怖に怯えている孝樹に対して二人は笑顔。

「いらつしゃい、芳野坂さん」と恐いほどの笑顔で言う。

それに対して紗美も「おじゃまします、千摩さん」とこちらも笑顔だ。

二人はその後無言でリビングに向かう。

それから一時間、テレビを観ていた。ただ、二人は全く内容を理解していないだろう。

なぜなら二人ともテレビよりも相手の事ばかりを気にしているように見えたからだ。

気づくと時間は七時になっていた。

二人は「お腹減った」と連呼し始めていたので、孝樹は晩ごはんを作ることにした。

ただ冷蔵庫を開けて焦った。

材料が思いの外なかったのである。

「参ったなー」と頭を掻いているとふと閃いた。そうだ残りを全部使って鍋にしよう。

それから彼は鍋の準備を始めた。

鍋は基本的には具材を入れるだけというシンプルな料理にした。

なので三十分で作り上げることができた。

彼はリビングにコンロやお皿を運び始める

「私も手伝うよー」と紗美は立ち上がり孝樹に寄り添う。

「世間一般常識では、それ手伝うって言わねーだろ」と孝樹は愚痴る。

「それなら千摩さんはどうなのよ、あれは許されるの?」と未だリビングの床に寝そべっている優華を指して言った。

「あいつは仕方ないよ。ああいうヤツだから」と慣れたように言う。

「孝ちゃんは何で納得しちゃってるの？」

「だって一緒に住み始めた時からあんな感じだったから」

と二人は会話を交わしながら準備をする。そんな中、リビングからイスを壁にしてこちらを覗く一対の眼があったことには全く気づかない。

準備が終わり、夕食が始まった。

三人という少人数のわりにはそこそこ盛り上がっている。

「ちょっと孝樹、そのネギ取って」

「ハイハイ。これか？」

「そう、それ。あと、うどんと白菜とコンニャクも入れて。それと豆腐も」

「もう豆腐はない」

「なら、鶏肉入れてよ」

「了解。紗美はどうする？」

「私はお野菜たくさん欲しいなー。あとコラーゲン摂れる食べ物が食べたい」

「わかった。んじゃすぐ準備するから食べすぎなよっ」と言つと、

彼女たちは声を揃えて「ハイ」と言った。

そして台所に向かった孝樹は慣れた手つきで鶏肉をさばき、野菜を切って二人のところに持っていった。

二人は顔を輝かせて「ヤッホイ」と言っつて再び食べだした。

しかし、二人はすでにそれぞれ三人前は食べているだろう。

この小柄な体と美の化身のような体のどこに入っていくのか、孝樹は不思議で仕方がなかった。

付け加えるなら孝樹は二人が一人前を食べているあたりですすでに満腹になっていた。

彼女たちはそれから三十分間、鍋の中をキレイに食べ尽くすのに精を出した。

気づけばすでに九時を過ぎていた。

そのことに気づいた優華が「そういや、あんたいつまでここにいるわけ？」と言う。

孝樹はついにその時が来てしまったと感じた。

「ずっとだけど」と知らぬ顔で言う。それでも優華は騙されない。

「ずっとおおおおお？」と雷に打たれたかのように立ち上がる。

「そう。今日からここに住むの。もう決めた」真っ直ぐ優華を見つめて言った。

「何であんたが決めんのよ！」と今にも噛みつきそうな勢いだ。

「あなたと孝ちゃんを二人だけに何て絶対しないんだからね」とこちらも立ち上がる。

数分、二人は睨みあった。そして二人は同時に頷き「調停成立」と言った。

「調停ってなんのだよ」と孝樹は顔をひきつらせて言う。

しかしそんな孝樹など眼中になしと言わんばかりに二人はなぜか仲良く風呂に向かう。

一人残された彼は佇むしかできなかった。

二人は風呂から出てくると優華の部屋にそそくさと上がっていった。

孝樹はわけが分からなかったが、とりあえず風呂に入ることにした。

お湯に浸かりながら十代なのに習慣になってしまったため息をついた。

「あいつら何考えてんだろ」と呟いて風呂に潜った。

風呂から上がると家中が静まり返っている。

電気はついてしたが、それを無意味にするような怖さがその空間には渦巻いていた。

「何か不気味だ」と言いながら時計を見る。

十時半を二分ほど過ぎていた。

明日の朝も早いし、準備だけして寝ようと思い、弁当のおかずを作ったりする。

色々な準備を終え再び時計を見る。十一時だった。

さすがに今日は色々起きて疲れたと思いながら自分の部屋へと向かう。

その時、ついでに母親が使っていた部屋を片づけて紗美用の部屋にする。

荷物はとりあえず父親の部屋に入れておいた。

部屋の扉を開き、内にはいつて孝樹はおかしな事が起きたと気づいた。

まず第一に、整理しておいたはずのマンガが机の上に三冊置かれていたことだ。

彼は恐る恐るその本に近づく。

彼は近づいて気づいた、これは自分の本ではないことに。

その三冊はどれも恋愛物だった。

ただ、自分の物じゃなかったので無視することにした。

第二に、クローゼットやタンスが開いて服が散乱していた。

さつきは確かに閉まっていたはずである、そして気のせいか服が枚数が足りない。

なので辺りを探しながら彼はそれらもきちんと片づける。意外に真面目な性格だ。

こんなことが他にも二、三度起きているのを孝樹は見つけた。

しかしそんな荒れようにも動じないのは今現在この家では何が起きてても不思議ではないからだろう。

部屋の整理を終えると十二時を過ぎていた。

さすがに眠くなり布団に入ろうとして彼は気づいた

あれ？何か布団膨らんでね？と。

彼は布団に手をかけ、勢いよくはがした。すると中から優華と紗

美が現れた

「お前ら人の布団で何してんだあああああ！！」と孝樹は夜中だというのに叫ぶ。

優華が先に目を覚まし一言、「うるさい」と言っつて再び寝てしまった。

今度は紗美が目を覚ました

「おはよう、孝ちゃんつてまだ夜中なんだ。んじゃ一緒に寝よ？」と布団をめくり孝樹を誘う。

孝樹は顔を真っ赤にして動揺しまくりながらも、「っ一緒にねよ？」じゃねーよ」と二人を布団の中から引きずり出そうと奮闘した。布団から出された二人は何故か孝樹のＴシャツを着ていた。どうやら先程見当たらなかったのはこの二人が着ていたからのようだ。

二人は少々不機嫌な顔をして布団から出て床に座った。

「とりあえず何で俺の布団にいたのかを聞こうか」と孝樹は冷静に問いかける。

「私はもちろん孝ちゃんと一緒に寝たいから」と紗美はにこやかに言った。

「んじゃお前は何で？」と今度は優華の方を向いて聞く。

「私の部屋じゃ寝れないんだもん」と口を膨らませそっぽを向いた。孝樹は現在優華の部屋がとても人が寝起きするには適さない魔の空間と化している事をすっかり忘れていた。

「そついやそつでした」

と返す言葉を失ってしまい、長い沈黙が三人の間に流れた。その時、紗美が時計を見て、

「とりあえず今日はもう寝よ？遅いから」と言った。

「寝るって俺はどこで寝たら良いんだよ？またソファーか？」と二人に聞く。

そして思い出した。「あっそつだ、お前の部屋用意したから」紗美に向かつて言う。

すると「それじゃ私のお部屋に来る？」と言った。

「それはだめよ。あんたと一緒に部屋にしたら何するか分かんないわ。孝樹は私と寝るのよつ」「優華が言う。

「ちよつと孝ちゃんは私と寝るのよ」

「二人とも話が進まないからストップ」と孝樹はいつの間にか小競り合いを始めていた彼女たちの間に割って入った。

「とりあえず話をまとめよう。何？二人とも俺抜きでは寝てくれないわけ？」

「私はムリです」

「私はあるが心配だから無理よ」と二人は共に意見を述べた。

「結果として話まとまってねーじゃんよ」と孝樹は思わず愚痴ってしまった。

「じゃーさ、床に布団敷いてみんなで寝ようよ」と紗美が提案した。

孝樹は「なん……だと……」と唸る。

「それなら良いかな。そうしよう」と優華も賛同し、床に布団を敷き始めた。

「ちよつ、何勝手にやってんのー」と叫ぶ孝樹の声も今の二人には意味をなさなかった。

夜が明けた。

結局孝樹は少ししか寝ることができなかった。そんな孝樹とは裏腹に孝樹を挟んだ両隣の奴ら（優華と紗美のことなのだが…）は熟睡している。

孝樹はいてもたってもいらなくなり、台所に下りていった。

一晩の内に様々な事が起きたせいで彼は心身ともに疲れ果て、目の下にはクマができていた。

しかしそんなことは気にも止めず、学校へ行くための支度をす。着替え終えて、弁当も準備し、朝ごはんを作っていると二階から二人が下りてきた。

彼女たちもすぐに着替えを終えて朝ごはんが並べられていく机に座る。

「ところでこれから一緒に住むって言ったわよね」と初めに優華が

口を開いた。

「そのつもりだけど、その話は昨日決着つけたでしょ」と紗美が答える。

「分かってるわよ。そうじゃなくてあんたの荷物はどうすんのよ」

「明日届くけど」

「はあ？それどゆこと？」

「だから、明日届くの。前もって準備だけはしておいたから後は送るだけだったわけ。それで昨日の内にここに送るよう頼んでおいたのよ」

と親指を立て満面の笑顔でいる。

しかし、優華は理解していた、この行動は明らかに以前からこの家に住むつもりでいた。と

それに気づいても顔には出さず、「それなら良いわ」と軽く流す。

「ところで、そろそろ朝ごはん食べないと遅刻するんだけど…」と二人の小競り合いの中に割って入り、時計を指しながら言った。

二人も指された先にある時計を見上げ、「ヤバッ」と声をあげる。

三人は席にさっと座り、大急ぎで口の中に食べ物をかきこみ、皿を流し台の中に割れない程度に投げ入れ（ホントに割れない程度に）、家を飛び出していった。その時間わずか三分だった。

学校に向かい、走りながら優華が孝樹の方を向き、息を切らせつつも、

「今日の晩ごはんはハンバーグが食べたい。わかった？」と言った。

「わかった、わかった。ハンバーグな、了解。んじゃ今日の帰りに材料買いに行かねーとな」とこちらは優華に置いて行かれないように必死で走る。

すると孝樹を挟んで反対側を走っている紗美（それなりに運動能力が高いようで優華に平然とついていく）は「私は大根おろしかけたヤツが食べたいな」と言った。

「大根なら家にあるから大丈夫だ」と頷き、その後は会話もなく全力で学校に走っていった。

校門に近づくともう登校し終わっていて、今現在入っていくのは二、三人程度しかいなかった。

下駄箱で靴からスリッパに履き替えながら「何とか間に合ったな」と一息ついていっていると、今通ってきた道をものすごい速さでこちらに向かってくる者がいた。

砂埃の中、その人物は段差に足を取られて顔からコンクリートに直撃した。

砂埃がおさまってくるとその人物が孝樹の親友、吉原壮汰であることがわかった。

体を伸ばしたままの体勢で地面に倒れている親友を見て孝樹は一瞬驚いたが、慌てて近寄り大丈夫か？と声をかける。

すると、ピクツと反応していきなり立ち上がり、

「クハハハハ、大丈夫に決まっているではありませんか！」と額や鼻から血祭りの如く血を嘔く。

「お前、それ絶対大丈夫じゃねーよ。保健室行ってこいって」と諭すと、

「うむ、そうさせてもらおうかな。ちょっと貧血っぽいからな」と歩いていった。

しかし孝樹は思った、それは間違いなく貧血じゃねえええええ。流血の方だろおおおお。と

しかし、そこにはすでに壮汰の姿はなかったので、あえてツツコまずに遠い目をしておいた。

「ちょっと何やってんの？早くしないとあなたのせいで遅刻になっちゃうじゃない」と頭を鞆で殴られる。

孝樹はその言葉で自分たちが遅刻寸前の危機的状況であったのを感じ出した

「すまん、急ごう」と孝樹は応えて二人が向かい始めていた教室の方に向かって走り出す。

階段を上り切ったところでチャイムが鳴り始めたのが分かり、走ってカー杯教室の扉を開き、中に飛び込んだ。

ちょうどその時、チャイムが鳴り終わってしまった。

「セーフ」と三人は息を揃えて言った。

それを見ていた教卓の阿波ちゃん「ギリギリだねえ」。気をつ

けないと遅刻しちゃうよぉ？」と満面の童顔っぷりで言った。

「すみません、ちょっと準備に手間取っちゃって…」と孝樹は軽く恥ずかし笑いをしながら自席へと向かう。

他の二人は軽く頭を下げてただけで自分たちの席へ去っていった。

「えっと、それじゃあはじめよつかぁ？ところで誰か吉原くんがどこに行っただか知らないかなあ？」と阿波ちゃんが言った。

忘れてた。そういやあいつ流血兼顔面強打等で保健室行ってたなー、と孝樹は思い、

「せんせー、吉原なら怪我して保健室行きましたけど」と言った。

「そつか、それじゃここにはいないよね。んじゃ私がやりまゝす」と言っただけ右手を天高く突き上げたかと思うと、そのまま生徒の方に真っ直ぐ下ろして、

「きり〜っ、ちゃくせ〜きっ、れ〜いつ」と言った。

若干数名の素直な人たちはそれに従い、額を強く打ちつけていた。しかし、担任の性格を熟知し、気をつけていたほとんどの生徒は額を打ちつけずにいた。

孝樹は内心、先生でいてこの人は大丈夫なのだろうか？と担任の行く末を思わず心配してしまう。

そこへ、まるで体の七割の血液を失ったように顔面蒼白な状態の吉原が弱々しく扉を開けて入ってきた。見るからに生氣と呼ぶようなものを感じることができない。

吉原は消えてしまいそうな小さな声で、

「おそく…なり…ま…した」と言った。

それを目撃したクラスメイトは背筋が凍りつきそうな何かを感じたような顔をしていた。

当然みんなと同じようにその姿を見ていた孝樹も動揺した。しかし孝樹はそこで一つ疑問に思い、

「お前さつきより状態がかなり悪化してないか？」と聞いた。

吉原はゆつくりと孝樹の方を向いて、

「いや、あの時はそれほどでもなかったから手当てしてもらってきただが、ハアーハアー、ここに、ゴホッゴホッ来る途中カハアグフウ、階段を踏み外したりハアーハアー、壁に激突したりハアーハアー、床をダイナミックに転んゴホオだりしたら…：…：…：こつ…：な…：つた」と言った。

その時、教室は一瞬にして先程とは明らかに違う寒さに襲われた。

てか何だよそれ。普通そんなことでそこまで怪我するのか？と孝樹は思った。

がしかし、こつも思っわけだ、まあー吉原ならばやりかねない、と。

きつとクラスの皆も同じ感想だったのだろう、みんな冷めた目で見つめている。

そこに、実は半分気絶状態だった阿波ちゃんが回復を果たし、覚束ない足取りではあるものの、教卓に立ち、吉原を見るなり、

「病院に行きなさ〜い！！」と叫び声をあげる。

少ししてからクラス中から、そうだそうだ救急車をー、や、早くしないと死者がーなど中にはわけの分からないことを叫ぶ者もいるが、大半は病院に行けという一つの目標を示すことを叫ぶ。

その意見に大賛成だった孝樹は立ち上がり、ゆっくりと吉原のところへ行き、優しく肩を叩き、

「救急車呼んでやつから輸血してこい」と囁いて、阿波ちゃんに一言告げて救急車を呼んだ。

そして電話を切り、吉原に肩を貸して校門に向かい歩いていった。とりあえずの問題は去ったようだ。

少しクラスが冷静さを取り戻した頃に、「そろそろ授業始めよっか」と阿波ちゃんが言う。

それに対し、「さんせい」とクラスのみんなが若干暗い声で応える。

終礼のチャイムが鳴り、クラスメイトが帰宅し始めた。

孝樹の机の周りには、孝樹以外に優華と紗美が立っている。

「私ちよつと用事あるから先に帰ってて」と優華は振り返り際に言っつて、走ってどこかへ行ってしまった。

「それじゃお言葉に甘えて一緒に帰ろ?」と恐いほどニクニクしてこちらを向く紗美が言った。

ああ、そうだな。帰りにスーパー寄って帰ろう、と軽くその恐怖を受け流す。

そして二人は教室を出て近くのスーパーに向かった。
校門を出ようとしたところ、二人は後ろから呼び止める声を聞き、立ち止まった。

振り返ると、そこには一村と小田野が並んで立ってこちらに手を挙げていた。

「どうかしたか？俺らこれから買い物行かないかんのだが」と孝樹が言つと、

「何いいいい！！お前ら、まつまさかつ付き合ってるのか？」と大げさなりアクションをとる一村。

「それはないでしょ、光うち。ね、雨うち」とこつちはこつちで面倒なニヤニヤ顔をして小田野は言つ。

「えっ？何ですか？小田野くん。それどゆこと？」と紗美は紗美で想い人への疑惑が浮上したことにより目を若干血走らせて小田野に詰め寄る。

小田野はちよつと嬉しそうな顔をしつつもそれを抑制して「どうしたのよ、紗美ちゃん。そんなに怒ってさ」と言つ。

それを見ていた一村が「もしや、紗美ちゃんって孝の事が好きなのか？」と顔を青くして言つた。

「そうよ？昔から孝ちゃん一筋だったもん。親の転勤で少しの間会えなかったけど、ようやく戻ってこれたのよ」とさらっと言つてしまった。

一村と小田野は顔をひきつらせてしまった。どうやら冗談のつもりだったのだろうが、そのせいですごい事実を知ってしまったようだ。

そして巻き添えをくってしまった孝樹の内心はドキドキである。なぜなら現在の状況がクラスのヒロインが自分を好きだとクラスの男子に言ってしまったというものだからである。

そう思っていた時、不意に正気に戻った。

二人を見ると、二人は鋭い視線をこちらに向けていた。

孝樹はとつさに、ここにいるときつと殺されてしまうと思い、紗美の手を掴み、全力でその場から走って逃げた。

スーパーに着くとちょうど特売セールが始まるところだった。

中に入ると、至る所から威勢の良いアナウンスが聞こえてくる。

「とりあえず、ひき肉と大根買わねーと家にはなかったぞ？」

「それじゃまずは大根買いに行こーよ。ちょうど安売りしてるし」

そして二人はごった返しになっている大根売り場へ突進していく。安いよー安いよー、今日は大根一本九十円だよー、と店員の声が聞こえてくる。

「おっ。今日はまた一段と安いな。二、三本買っておこっ」

「そうだね。あっ、見て見て孝ちゃん。白菜が安いよ？」

「ホントだ、一つ買っていこう。鍋作れるからな」と二人は野菜をいくつかカゴに入れていく。

そして、二人は魚コーナーを通り過ぎて肉コーナーへとおもむい

た。

すると、そこには見覚えのある後ろ姿が牛肉か豚肉かで悩んでいた。

「あれ？倉塚じゃん。買い物？」と後ろから優しく声をかけたつもりだったのだが、

「ひゃん！！キャツ！！にや？孝樹くんじゃないですか」と目の前に刃物を突きつけられたような驚き方をして彼女はカゴを落とすってしまった。

「ごつごめん、驚かすつもりはなかったんだけど……大丈夫？」と孝樹はしゃがんでカゴを拾って渡してあげた。

彼女は顔を真っ赤にして受け取り、走って逃げていった。

しかし、逃げる途中でおもいきり顔面から転び、こちらを振り返り、また走って行ってしまった。

「いやゝ、相変わらず俺って何か避けられてるよな」と孝樹は苦笑をするが、その一部始終を見ていた紗美は去っていった倉塚の方を見てしばらくしてから孝樹を睨んで再び買い物をし始めた。

何でコイツこんな不機嫌なんだろう、と思いつつも時間も遅くなり、外も暗くなり始めたので、早く済ませようと買い物を急いだ。

店を出て家に向かってっていると、前から近づいてくる人影が見えた。孝樹にはその影が誰なのかすぐ分かった。

同じクラスの和泉院琴音である。孝樹の想い人でもあったりして。

「こんばんは、孝樹さま。それと芳野坂さま？お二人でお買い物ですか？」

「ああ、そうだよ。コイツとは幼なじみなんですよ」と必死に孝樹は訴えた。当然紗美にも、孝樹が彼女に抱く想いが伝わり、紗美は少し琴音を睨む。

「なぜかしら。私睨まれてる気が致しますわ」とおどおどしながら二人を見た。

「気のせいですよ。ハツハツハツ」となぜか紳士風に言っても、睨んでいるのが明らかに紗美だと分かっている孝樹は気が気ではいなかった。

「それじゃ私たち帰ってごはん作らないといけないので、ここで失礼しますね」と紗美が笑っていない笑顔で琴音に言う。

「そうですね。それではまた明日、ごきげんよう」と琴音はお辞儀をして歩いていく。

「断じて二人きりではありませんから」

去っていく琴音の後ろ姿に叫びかけた。

そして見えなくなった頃、おもいつきり足を踏まれてしまった。

「今のどうゆうこと？孝ちゃん是我的事が好きなんですよ？なんで和泉院さんのご機嫌ばかり伺ってるわけ？」

ものすごく不機嫌な顔をして孝樹に詰め寄るのだった。

それを孝樹は軽く受け流して話題を変えようと頭を回転させ、ようやく出た言葉が

「早く帰らねーと優華がぶちギレる」だった。

紗美はふぐん、と目を細めて、「まっいいや」と呟いて心の中で決心を一つした。

“我が敵は和泉院琴音なり”と。

孝樹はそんなよく分からない決心をして手を握りしめている紗美を少し恐ろしく眺めた。

家に着くと、珍しく電気が着いていなかった。

普段ならついていてもなんら不思議はない時間だ。

「あれ？まだアイツ帰ってきてねーじゃん」

「ホントだ。どこいつちゃったんだろ？」

と普通に優華を気にする孝樹と内心二人きりだと笑う紗美は玄関で言葉を交わした。

二人はそのまま台所へと向かい、買ってきた食料品などを手際よく片づけていく。

片づけ終わり、夕食を作ろうとし始めた時、不意に紗美はどこかへ言ってしまった。

なんだよ、手伝うって言ってたじゃねーかよと思いつつも口には出さず孝樹は一人、黙々と作り始めた。

五分ほど経って具材を切っていると、後ろから名前を呼ばれた。

孝樹は思わず振り返り、息を呑んだ。

そこにはピンクのエプロンを着て、肩まであった髪をポニーテール風に縛った紗美が立っていた。

その姿はまさに、琥珀色に輝く湖の畔に咲く一輪の花のようであった。

「どうかな？孝ちゃん。私に似合うかな？」と恥ずかしそうに顔を背けつつも、時々目だけでこちらを見ていた。

一瞬にして孝樹は心を奪われたが、冷静になり心を取り戻した。俺には和泉院琴という心に決めた人がいる。と

頭の中を必死に落ち着かせた。その時、紗美が近づいてきて、

「ねえーねえーどうなの？似合う？似合わない？」と言った。

「あー似合う、似合う。だからあんまくつつくんじゃねーって」と近づいてくる紗美を押し退けた。

「もー冷たいなー。少しくらい可愛がってくれても良いじゃない」と頬を膨らます。

「悪かったよ、とりあえず晩ごはんだけ作ろうぜ」と言い、作り途中のハンバーグに手をつけた。

「うん。それで私は何するの？」

「そうだなー、んじゃ大根おろし作ってくれ」

「了解！大根貸して」

「ほい、皮は剥いたからこれ全部すってくれ」と差し出した掌に皮をキレイに剥いた大根をのせてやる。のせられた大根を握り、棚からすり器を取り出してすり始める。

ようやく平穏な空気になったなあと孝樹が思っていると、玄関が開く音がしてその平穏は破られた。

「ああーもう腹立つ。なんなのよもう！」と手当たり次第に怒りをぶちまける。

優華がまた何かをやらかしたらしい。

彼女は入ってきて廊下から台所を眺めていた。

当然孝樹たちも優華を見た。そして、孝樹は持っていた包丁を置いて優華のもとへと飛んで行った。

「お前……どうしたんだよ。その格好、ボロボロじゃんか」

孝樹はあたふたしながら彼女の服を軽く調べた。

調べ終えて、こりやだめたな、生地自体が裂けちまってる、と困った表情を浮かべる。

その手際の良さを台所から眺めていた紗美が目を細くして冷たい視線で「てか、何したの？」と言った。

「猫に襲われたのよ」と二人から目を背けて言った。

二人は黙ってしまった。

何と言っているのか分からないのだ。

いくらなんでも猫に襲われただけでここまでボロボロになるものだろうか。

それ以前に何で猫に襲われてんだよ、と孝樹は心のなかでツッコんでしまう。

紗美は紗美で高二にして猫に襲われたんだと心の中で笑っていた。

それから五分ほどこの空間の時間が止まってしまった。

そして初めに孝樹が口を開いた。

「とりあえず、優華は風呂と着替えしてこい。その間に飯の支度しとっから」

「分かった。今日の夕ごはんはハンバーグでしょうね？」

何故だろう、自分の犯した罪のようなものをさらっと流してものすごい睨みを効かせて孝樹を見上げる。

一瞬蛇に睨まれた蛙のように固まる孝樹であったが、すぐに正気を取り戻し、「ハ、ハンバーグだよ」と答えた。

「なら良いのよ」と言って優華は自分の部屋くつろぐ部屋へ上がっていった。

孝樹はため息をつきながら台所へと入っていく。

そして入った瞬間に背筋がゾツとするのを感じた。顔を上げると少し目を細めて立つ紗美が目に入った。

紗美は孝樹と目が合うとニコツと笑って

「ハンバーグの続き作るっか」と言った。

孝樹にはその笑顔が一目で作り笑顔だと分かった。

「ああ、作るっ」と言いつつも背中にはすごい悪寒を感じずにはいられなかった。

ハンバーグを焼いているとお風呂から優華が出てきた。

優華は真っ直ぐ孝樹の方に来ると「ちよつと孝樹っ！入浴剤はミルクじゃなきゃだめだって言っただけでしょ？何で森林浴なのよ」と言った。

「そんなこと言っても売ってなかったんだからしょうがねーだろうが」と言つと、

「ダメ犬」と吐き捨てた。

だつだめいぬ？それはいくらなんでも言いすぎではなからうか。確かにミルク以外は嫌とは言われてはいたが、売ってなかったものは仕方がないではないか。

売っていないものをどうやって手に入れると言つのだ。

一時間もかけて買いに行けというのか。と孝樹が心の中に嘆いていると、

隣に立っていた紗美が孝樹の心中を察してか、優華に対して、

「ちよつとワガママじゃない？」と言つた。

すかさず優華も反論を始めた。

「あなたには関係ないでしょ？」

「関係あるもん。私もここに住んでるんだから。それに人の恋人を犬みたいに扱わないでほしいんだけど」

「ちよつ、誰が恋人だ、誰が」

「あなた、うっさいのよ。じゃま、どけ」

「ちよつと私のダーリンに何するのよ！」

それから約一時間、言い争いが終わることはなかった。

気づくとすでに九時近くになっていた。

「ハァーハァーもうこの話はやめよう。きりがないから」と孝樹は言う。

孝樹の前で立ち、睨み合っている二人は同時に頷き、「そうする」と言った。

そして三人は冷えきってしまったハンバーグを温めて食べ、孝樹はお風呂に入ることにした。

自分の部屋に着替えを取りに階段を上がっていると紗美が追いかけてきた。

「お風呂入るんでしょ？」と子犬のように首を傾げて聞く。

「そのつもり。何か用でもある？」

すると首を左右にぶるぶるっと振って、「別に、ただ一緒に入ろうかなー」と言い出した。

孝樹は何となく「へー」と言った。しかし、よく考えてみると間違っていることに気づく。

「ん？いや、ちょっと待ていいいい！何か間違ってるぞ！？」とこめかみに血管を浮かせつつ叫ぶ。

「何が？」と不思議そうに紗美は聞き返した。

「何がって一緒に風呂入るってところがだよ！！」

「良いじゃん別にー」と紗美は頬を膨らます。

「良くない良くない。つーか一緒に入るとか俺嫌だから、先入る」

孝樹はそう言い残し、全速力でお風呂へと向かった。残された紗美はちっ、と舌打ちして優華のもとへもどっていった。

お風呂から上がるとリビングのソファに優華と紗美が座っていた。

孝樹はお風呂が空いた事を伝えようと紗美に声をかけた。

しかし、紗美は少しも動かない。

不思議に思い、顔を覗き込んで唸った。

眠っていたのだ。

「寝てやがる」と言っつて紗美を揺すつて起こそうとするがなかなか起きない。

「おい、いいかげん起きろつて」と軽く頬を叩いてみた。

すると、紗美が起きた。

「ん？何よ孝ちゃん、人が良い夢見てるのに」と目を擦りながら言っつた。

「わるいな。だが、風呂が空いたから」

「了解しました。それじゃ行ってきまーす」

紗美はお風呂に向かっていった。

残った孝樹はもう一人、ソファで寝ている方を見た。

優華は人形のように美しい姿で眠っていた。

孝樹は一瞬見とれてしまったが、気を取り直して優華を起こし始

めた。

すると、ああとか、うおとか唸って目を開けた。

「やっと起きたか。もう部屋で寝ろ」とソファに座っている彼女に言った。

「うん、そうするわ。んじゃおやすみ」と言って彼女はふらつきながら歩いていった。

それを見送った後、孝樹はソファに腰を下ろしてテレビを見始めた。

三十分が過ぎた頃にお風呂から出た紗美がやってきた。

「私のために起きててくれたんだ」と明るい声で言う。

「そんなんじゃないよ」と孝樹は落ち着いた声で答える。

「なーんだつまんないの」と言っただけで孝樹の隣に座って、「もう少ししたら私も寝るよ」と更に言った。

「俺もそうするか」と孝樹もそれに便乗した。

それから二人は無言のまま時刻は十一時になっていた。

「私先に行くから」と紗美は立ち上がり、歩いていった。

「了解」と一言だけ言って孝樹は戸締りやガス栓、電気などを確かめて回った。

結構な几帳面ぶりである。

確かめ終わって孝樹は二階へ上がって行き、自分の部屋の扉を開けた。

部屋を一見した彼からはため息が漏れた。

彼の見た先 自分のベッド は二人に占拠されていた。

彼は思った。今二人を起こすのは面倒だから諦めて床で寝ようと決めた。

そしてどこからともなく まー押し入れなのだが から一式の布団を出してそこへ寝転がった。

その瞬間、ベッドから怒声が聞こえた。紗美である。

「コラアアアア！！どうしてベッドに入ってこないのよっ！」

孝樹はゆっくりとベッドの方を向いて、だって狭いから、と呟く。

「狭いからって何よ何よ何なのよ！せっかく待ってたのにー！」

一向に紗美は怒りがおさまらないらしい。孝樹は再びため息をついた。

「もういいから自分の部屋で寝ろよ」疲れた声で言う。

「もういいよー、うえーん」半分嘘泣き状態で部屋から飛び出していった。

ようやく平穏が訪れたと思った。

孝樹はこんな日が続くのかと思うと気が滅入ってしまう。とりあえず今日はもう寝ようと目を閉じた。

第4話 <夢とテスト・前編>

そこは一面銀世界だった。

今までに見たことのない様な美しさである。

そしてそんなどこまでも続く雪の上に俺は立っていた。

月が出ていることから考えるときつと夜なのだ。周りも暗いし。その月が真上にあることから想像するに0時位だろうか。

「どうしよう」「眩きながらもどこへともなく歩き出す。

しばらくして雪が降り始めた。

そしてそれはすぐに吹雪へと変わっていった。

もはや目も開けていられないほどになってきている。

どうしたらと彼は凍える体をさすりながらも歩き続ける。

どこまで行っても終わりが見えない。

彼はもうだめかと思った。

しかしその時、彼は目を覚ました。

そして今までの銀世界が全て夢だと気づいた。

「今のは夢か。夢で良かった」額に手を置き、心を落ち着かせた。

そして現実の出来事に彼は気がついた。

目を開けると自分の上に紗美が乗っかっているのが目に入った。

「お前さー、朝から何で人の上に乗ってんの？」と問いかける。

「別に：ただ目覚めが良いようにと思つて」「エヘツと舌を出す。しかし、そんな表情をした紗美でも孝樹の感情を動かせない。

「とにかく俺の上からおりてくれよ」

「えーやだよー」と二人が騒いでいるとベッドの方でゴソゴソと動く音がしたかと思つと

「ああーもうーうーるーさーいー」と誰かが怒鳴つた。当然、眠っていた優華である。

二人はビクツと飛び上がった。

慌てて孝樹は謝つた。しかし紗美はそそくさと部屋を出ていってしまった。

「もう朝から何なのよあの女は」「イライラしながら言った。

「ごめんごめん。とりあえず起きよう?」

「起きようつてもう起きてるわ」

「すみませんでしたっ」孝樹は部屋から飛び出した。

皆が仕度を終えて下の食卓に集まつた。

既にもう朝ごはんの用意はされており、孝樹は三人で飲むための紅茶を煎れていた。

紗美はリビングのソファに腰掛け、手鏡で念入りにチェックをしていた。

その時、玄関のベルが鳴つた。

「こんな朝早くから誰だ？」と孝樹は玄関へ歩いていく。しかし、紗美も優華も気にする風もなく朝ごはんを食べ始めた。孝樹はため息をついて玄関の鍵を開けて扉を開いた。するとそこには壮汰が立っていた。

「おはよう、孝樹」と彼は孝樹に手を挙げる。

「おはよう、吉原」と孝樹も彼に対して手を挙げる。

「おいおい孝樹、何で『おはよう、吉原』って言ったんだ？そこは『おはよう、壮汰』だろ？」

「そりやすまん。…てかお前いつから俺の事孝樹って呼び始めた？昔から雨河だったじゃん」

「だってよ、友達になってかなり経つんだぜ？そろそろ名前で呼んでも良い仲だろ？もしかしてまだ早かった？」

「そんなことはねーよ。まーそうゆうことなら俺も下の名前で呼ぶよ」

「サンキュー」

「ところでさ、壮汰こんな時間にどうしたんだよ？いつもなら朝練の時間じゃねーの？」

「あー今日休みなんだよ。部活」

「そういうこと。んじゃ今時間あるんだ。てかもっとゆっくりすりゃ良いじゃん、家でよ」

「いやいや。家にいてもなかなか休まらんさ。それより孝樹ん家あがって良いか？」

「俺は良いけど、他の連中が何て言うかさ」

「気にしない気にしない。お邪魔しまーす」

そういうと、孝樹が止めるのも構わず部屋に入っていった。

孝樹は玄関を閉めて慌てて壮汰の後を追いかけた。

すると中から三人の悲鳴が聞こえてきた。

分かりきったことだが、どうやら三人が顔を合わせてしまったようだ。

孝樹はどう説明しようか考えながらリビングに入った。

そこには鞆を落として立っている壮汰がいた。

孝樹は壮汰に近づくと優しく、「まー座ってくれ」と椅子をひいた。

壮汰はその椅子に座ると、「どう言うことだい？孝樹」と言った。

孝樹はこの一ヶ月間に起きたことなどを細かく話した。

壮汰は理解したのか、頷いて、「そりゃ大変だな」と笑った。

孝樹はシンクの台所に手をかけて、笑い事じゃねーよこっちは、と嘆いた。

そんな彼を見てから壮汰を見る紗美の目はどこか冷めている気がする。

優華は壮汰から目を離してはいるものの、虚ろな視線で机の一点を見続けている。

それからしばらくは皆で少し騒いでいたが、壮汰が時計を見て、「そろそろ学校行こう」と言ったことによって雑談は打ち切られ、皆揃って家を出た。

四人が教室に入ると孝樹のもとに小田野と一村がやって来た。

「おっはよ〜雨っちー」

「おはよう、孝」と二人が挨拶をする。孝樹はそれに手を挙げ、「オッス」と短く応えた。

「そっぴやさ〜、雨っち勉強してる〜？」

「勉強？いや全くしてねーな。てかよ、何の勉強？宿題なんか？」

「いや違うぞ孝。テストだテスト」

「テスト？テストって何の？」

「お前大丈夫かよ。今テストって言ったら前期中間検査しかないっしょ」

「前期中間検査……」

孝樹は言い終えてハツとなった。そう、もうすぐ高二になって最初の定期検査があるのだ。

「忘れてたな〜。まっ何とかなる」

「孝ってある意味すごいよな」

「ある意味だけどね〜」

そう言って二人は孝樹から離れていった。

孝樹は、あつある意味だと…心にグサリとくる。

そして、それと入れ替わりに壮汰がやって来た。

「やあやあ、一体どうしたんだい？」

「どうしたって中間考査の話聞いて驚いてんだよ」

「中間考査？そういえばそろそろだな。なあーに問題ないさ」

そして壮汰は孝樹の肩に手を置き、何度か頷いた。

彼は頷いた後にいきなり孝樹の背中を叩き、席へと走っていった。

「やっぱり良いわよね」と突然隣で声がした。

孝樹はビクツと飛び上がり、ゆっくりと左下を見た。

そこには腕を組み、仁王立ちしている優華がいた。

そして孝樹は何となく気づいてしまった。

優華が壮汰の事をやっぱり好きなのだということに。

その時、彼の心には少し悲しい感情がわき起こっていた。

ただ彼にはこの感情が一体何なのか、まだいまいち分からなかった。

一方、優華は孝樹が見つめていることに気がついておらず、目を輝かせて壮汰の事をジツと見つめ続ける。

「そろそろ時間だし、座るぞ」と孝樹は気を取り直して優華に言っ

た。

「そうね、そうしましょう」と優華は言う。

二人はそれぞれの席へと向かい歩き出した。

それでも孝樹の心の中にはモヤモヤしたものが残ってしまった。

その後はまともに勉強をする気にはなれなかった。

聞いていないとかそういうのではない。

ちゃんと聞いてはいるし、ノートもしっかり写している。

教科書に線だつてちゃんと引いたりしている。

つまり授業はまじめに受けているのだ。

ただ、どこかやる気というものであるうか、そういうものが完全に無くなってしまったのである。

三限目が終わった時、孝樹は机の中から四限目の用意を取り出すうとして落ちた一枚のプリントを見た。

それは朝、教室に入ってきた阿波ちゃんが配布した二週間後に控えた中間考査の科目表だった。

孝樹はとたんに現実に戻されてしまった。　　そっぴやこれの事忘れてた。

やばいな、どうしよう。と頭を抱えて悩んでいると前から壮汰が歩いて……というかスキップをしながら、「どう……した……孝……樹……」と声をかけてきた。

相変わらず変わってるよな。と考えていたところにふつと彼は閃いた。

「おい壮汰、お前って頭良いよな？」

「えっ？頭良いか悪いかと聞かれたら良い方なんじゃないかなろうか、ね？」

「じゃーよ、考査が終わるまで勉強教えてくれよ」

「勉強？お安い御用だ御用だ」

「サンキュー」

こうして考査が終わるまで約二週間、特別強化合宿が決まった。ただこの時、優華と紗美はこの事実を知らなかった。

翌日の午後、授業が終わり、クラスの皆が思い思いに教室を出ていく中、孝樹もまた荷物を鞆に詰めて帰路につこうとしていた。外は綺麗な夕焼け空となり、少しこの季節には寒い風が吹いている。

グラウンドではサッカー部が練習に精を出す。

ちなみにこの学校のサッカー部はこの一年で飛躍的に強くなった。それは現部長の賜物であった。更に加えるなら、その部長というのは壮汰だったりする。

壮汰は一年生の間に、荒んでいたサッカー部を立て直してその上、県大会一位と言う好成績をおさめた。

そんなサッカー部を窓から眺める孝樹は不意に時計を見た。あと一分で五時になる。

鞆を持ち直し、教室に残っている一村たちに挨拶をして孝樹は出ていく。

彼は真っ直ぐ昇降口へと歩き、上靴を靴に履き替えて外に出た。外に出た孝樹は少しの間、綺麗に染まる空を仰いだ。

空にはゆっくりと風に身を委ね、次々にその姿を変えてゆく雲がいくつも見える。

真っ白に見えるが、時折夕陽に照らされオレンジ色に美しく染まる。

そんな空を仰ぎ、少し心が晴れていく気が孝樹はした。

「すまん、すまん。待たせたな」

そう言つて壮汰が走つてきた。

大急ぎで着替えたのだろう、制服のボタンは全開になり、眼鏡は半分ずり落ちてしまい、鞆からは体操服やら部活のジャージやらが飛び出していた。

「何か悪かったな。急がしまつたみたいで」と孝樹は頭を下げる。

「大丈夫だぞ、後は片付けただけだから後輩がやってくれる。ちゃんと事情も話して納得してもらってるし。問題なし」

彼は親指をビシツと立て、「さあ、行かん。アツハツハツハツハ」と孝樹の前を歩き出す。

孝樹もすぐ追いかけて、壮汰と並んで歩く。

校門を通りすぎ、家に向かいながら孝樹は思う。

やっぱりコイツとなら面白い生活が送れそうだと。

そう思いながら歩いていると、「ところで今日の晩ごはん何食う

んだ？」と聞かれた。

孝樹は答えようとして全く考えていなかったのを思い出し、逆に「何食いたい？」と聞き返した。

壮汰は少し考えて、本格ボンゴレパスタと呟いた。

しかしそんな完璧イタリアンな料理が孝樹に作れるはずもない。当然拒否した。

「それじゃ普通の鍋で良いや」と若干なげやり気味で壮汰は言った。

鍋か、鍋ならあいつらも文句は言わんだらう、と考えて二人はスーパーに向かう。

スーパーに入ると、壮汰は一目散にどこかに向かつていった。

孝樹は順路に沿って野菜コーナーに向かった。

野菜コーナーではまだ特売の類いは行われていなかった。

それでもこここのスーパーは他のスーパーに比べて安いのか、多くのお客が買い物をしている。

ママーお菓子買ってとかあら、これお得だわとか、買い物客のざわめきが店の中を活気良くしていた。

きつとこの店には赤字だとかそういうシビアな世界とは無縁だろう、と考えながら鍋に入れるネギやしいたけをカゴに次々と入れた。他に何を入れようか考えていると壮汰が戻ってきた。

「孝樹ー肉だぞ肉ー、見ろみる超旨そうじゃん」

そう言いながらやってきた壮汰は抱えきれただけの牛肉や豚肉のパックを持ってきていた。

「壮汰、いくらなんでも持ってきてすぎだろ。三パックあれば良いんじゃないか？」

そうして壮汰の抱えているパックの内、三パックだけカゴに入れて、他のヤツは戻してくるように言った。

壮汰は少し残念そうな顔をして戻しに向かった。

孝樹は壮汰を見送り、また歩き出した。

豆腐や鍋の素、こんにゃくなどをカゴに入れつつレジに向かって進んでいく。

レジにつき、列に並んでいると壮汰が戻ってきた。

「お前どこまで肉戻しに行ってたんだよ」

「いやーすまんすまん。少し迷っちゃったのだよ……アハハハ……」

「アハハハ……じゃねーだろうが。何高校二年にして迷子になってんだよ。しかもこのスーパーそんなに広くないぜ？」

「迷ってしまったものは仕方ないじゃん」

「仕方ないってお前……」

その時、レジの順番がきてしまって説教をしてる暇がなくなってしまうた。

店を出てから二人は再び家に向かい歩き出した。

空は完全に暗くなり、星や月がまるで生きているかのように輝いていた。

二人の家がそれぞれある分かれ道に着いた。

「んじゃ後で泊まりに行くわ」と壮汰は全速力で無駄に手足をあげ、駆けていった。

内心、やっぱり変わってんなーなんて考えつつも、おうつと手を振った。

壮汰もいなくなり一人家に向かう。

暗い道に一定間隔である街路灯に時折照らされながら歩く。

しばらくの間、何も言わず、何も思わずほとんど無意識状態で家に着いた。

小さいながらもしつかりとした門を静かに開け、玄関の鍵を開けようとして、大切な事を思い出した。

やべっ、優華にも紗美にも話さずに独断で決めちゃったっ

孝樹の顔からは徐々に血の気が失せていき、手とかからは冷や汗がどンドン出てきた。

心の中で、どうしよう、これホントピンチなんじゃね？きつと優華は間違いなく、紗美は恐らく、キレル。

あの二人からの同時攻撃にはまず耐えきれないだろう。かといってここで逃げてても壮汰が来て、事情を話せば同じこと。更に壮汰を待って、連れて逃げてても、見つかってアウト。

孝樹はより一層全身から血の気が失せるのを感じた。

そしてどの道アウトじゃん、と覚悟を決めた。

鍵を開けて玄関に入り、一言「ただいま」と言う。

すると、どこからともなくすごい勢いで近づくと人の気配を感じた。

「おっかえりー、こーうちゃーん」

一種のダイレクトアタックのような飛び込みを紗美がした。

思いの外強かったのか、孝樹は受け止めきれず、思いつき後頭部を玄関の取っ手にぶつけた。

孝樹は後頭部を撫でながら若干泣いてしまったせいで赤くなった目で紗美を見下ろし、

「痛いだろうが！時と場所を考えろ。てか、そもそも飛びつくんじゃねーよ」と怒る。

「だって孝ちゃん遅いんだもん。いつもだいたい夕方くらいには帰ってきてたじゃん。何してたのよ」

全く悪びれずに紗美は言った。

そしてそれは孝樹が今最も悩んでいる事そのものだった。

孝樹はすごく迷った。

今ここでとりあえず紗美にだけ事情を話し、理解してもらおうべきか。

それとも、この場合は黙っておいて、後で二人一緒に教えるべきか。

ただ、どちらも当然リスクを伴う。

非常に高い「リスク」を。

孝樹は心の中で無事でありますように、と祈りながらも話すことに決めた。

紗美を落ち着かせ、これまでの事情を一分以内で完璧に伝える。しかし、話を聞き終えた紗美は素のままの声で、別に良いんじゃないかな、と言った。

予想外の展開に困惑するものの、とりあえず自分の命が繋がったことに一安心する。

がしかし、紗美は孝樹が最も恐れている一言を言った。

千摩さんは何て言うのかな？ と。

突然現実に戻され、更に喜び一転いつきに恐怖へと突き落とされる。

「そうだよな、でも決めちまった事だし、赤点は御免だからな。それにまんざらでもねーんじゃねーの」

逆に清々しい程の顔で玄関を後にする。

その後ろを紗美も追いかける。

リビングに入ると優華はテレビの前にあるソファーに座り、コメディ番組を大笑いしながら見ていた。

孝樹が入ってきたと分かったのか、テレビからは決して目を離さずに、

「帰ってきたんならさっさと晩ごはん作りなさいよ」などと言いやがる。

普段の彼ならここで一言一言文句を言うだろう。

しかし、今日の彼は少し違っていた。

その命令には素直に従う素振りを見せるが、真っ直ぐ優華の視界

範囲内に入り、

「ちょっとお知らせしなくてはいけないことがございます」

そして、全ての事を話した。

もちろん、先刻説明して、理解してもらえた紗美の援助のもとである。

聞き終えて、優華は少しニヤニヤし始めた。

やはり壮汰に好意を抱いていたようだ。

「まっまままー良いんじゃない？それと、私も勉強教えてもらおうよ？今年も赤点ばっか取ってるとさすがにまずいし」

そう言いつつ、目だけは合わさないよう背けても顔は全力で嬉しそうだ。

「もうこの話は終わりで良いでしょ？早くご飯食べようよ孝ちゃん」
手伝う気はさらさら無いのだろう、紗美は優華の隣に座り、だだをこねる。

誰にも分からないくらいのため息をつき、台所へ行く。
少々急ぎながら作業に取りかかる。

なぜなら今日から四人分を作る必要があるから。
手を洗い、リズミカルに野菜を刻んでいく。
その間にも鍋を火にかけ、ご飯を炊く。

その時だった。

玄関のベルが鳴り、大きな声で、こーうきくーん、まーなびーま
しよー、と聞こえた。

恐らくご近所さんにもはつきり聞こえただろう。

孝樹は急いで進行中の作業を止めて玄関に行った。

扉を開くとそこには壮汰が立っていたのだが、その姿に孝樹は思わず息を呑む。

なぜなら壮汰の姿はこれからどこまで旅行をしに行くのだろうと思わせるほどにいっぱいのお札を三つと中身を溢れさせた部活用鞆一つといった重装備状態だったからだ。

「一体お前何持ってきたんだよ」

「そんなもの決まっているではなかるうか。勉強用の道具と服、それに筋トレ用の重りに魔除けのお札だろ？他にはトランプに将棋にカバディセットを持ってきた」
さらっと言った。

（何なんじゃコイツアアアアアア。天然なのか？わざとなのか？どちらにしても間違いないバカダアアアア）

何て心の声は一切顔に出したりはせず、苦笑いといえそうな顔をして

「まああがってくれ」

そう言って部屋へと促した。

「ではではお邪魔致しまする」とわけの分からない行動を言った。

リビングへ向かう壮汰の背中を見ながら遠い目をして、何かうん、楽しくなりそうだな、と一人感傷に浸る。

そこへリビングから壮汰と入れ替わりに紗美がやってきた。

「ねえーねえー早くこーはーんー」

そう言い残して再びリビングへ戻っていった。

孝樹も戻ろうとして靴が散乱している事に気づき、ちゃんと揃える。

やはり几帳面である。

リビングに入ると三人がテレビを見て騒いでいた。

しかし、優華は気配で分かったのか、テレビからは少しも目を離さず、さっさとご飯作りなさい、と罵声が飛んだ。

孝樹は黙って台所へ移動、先ほどの続きに取りかかろうとする。

そこへ横から、私も何か手伝うよ、と紗美が声をかけてきた。

「ありがとな、んじゃ頼む」

「了解」

そう言って二人は黙々と料理をし始めた。

料理がもう出来上がるという時、ボソッと、あの二人どうしてると思う、と紗美が問う。

聞き取れるか取れないかくらいのその声をしっかりと聞いた孝樹はその問いに対し、

「それなりに楽しくやってるんじゃないか？」

ちよつと無責任だったかな、と思いつつそう言った。

紗美はその言葉にあっそ、とだけ言い、仕上げに取りかかった。

一方その頃、リビングはというと、一種の攻防戦のような雰囲気
を醸し出していた。

「アハハハハ、いやーこの芸人は実に面白いなー。千摩は好きな芸
人いるのか？」

という質問に対し、こくりと頷く。

「ほう。その芸人の名前は何て言うんだ？」という質問には、紙に
さらさらっと文字を書き、壮汰に見せる。

「ほう。平句仙人というのか。今度見てみよう」と言った。

つまりは、二人だけになってから壮汰から話しかけることは出来
ても、優華から話しかけることが出来ないのだ。

壮汰はあれこれと優華に話しかけるが、優華の方は頷いたり、紙
に書いたりと直接話することができない。

そんなやり取りがしばらくの間続いた。

優華はほとんど下を向き、指をずっといじっている。

壮汰の前では優華は普段の強者ぶりを全く発揮できない。

二人は黙ってしまった。聞こえるのはテレビの音と台所から聞こ
えてくる話し声だけとなった。

どうしよう、何話したら良いのよっ。何も浮かばないわよっ。孝
樹助けなさいよねっ、と優華は思う。

壮汰は……特に何も考えたりしていなかった。

その時だった。台所から孝樹と紗美が入ってきた。

「飯の準備が出来たぞ、さあ食おうぜ」

「美味しそうだよお？」

二人はリビングの静まりきったこの何とも言えない空気に気づいたのか気づかなかったのかそう言った。

優華は天の助けとばかりに、食べよう食べよう、と言った。

タイミング良くちょうど壮汰の腹も鳴ったので、四人は少しばかり遅い夕食を食べることにした。

ちなみに、本日の夕食は壮汰提案の鍋に、白いご飯、孝樹特製のドレッシングのかかったサラダであった。

優華・紗美・壮汰はイスに座り、孝樹は茶碗にご飯をついで、それぞれの前に置いていった。

そして孝樹が席に座ると、四人は声を揃えて、「いただきまーす」と言った。

それからはまるで宴会のように盛り上がった。

座っている席は優華がリビングと廊下に近い一角に座る。

これはすでに定位置化してしまった。

そのため、孝樹は優華の面倒をみるために、常に隣に座る。

こちららもほぼ定位置と言えよう。

紗美と壮汰は別に定位置とかは決まっていなない。

今回は孝樹の向かいに紗美が座り、優華の向かいに壮汰が座る、という形をとっている。

時間が経つにつれて、少しずつ騒がしくなっていく。

優華は壮汰の事が気になりすぎるのか、食べようと口に運んでい
るものをその途中で落とし、服を汚している。

「孝樹はその汚れを拭きとったりしている。」

「紗美は悪戦苦闘している孝樹に横からちよっかいをかけている。」

「壮汰は……楽しそうに笑っている……。」

食事が終わり、今度は孝樹と壮汰で片づけをすることになった。

優華と紗美はとりあえずお風呂に入ってしまったおう。そういう事で
話が決った。

二人は台所から出ていき、残った孝樹と壮汰は皿洗いを始めた。

三分の一ほど洗った頃だろうか、お風呂場では何やらものすごい
騒ぎが起きているのか、すごい声が聞こえてくる。

「あいつら一体何してんだよ、近所迷惑じゃねーかよ」

「ハッハッハッ、ここが近所迷惑？それほどじゃないであろうっ？」

「まー否定はしないけど……」

「気づいた人もいるだろう。」

「実はこの雨河家は小さく見えるが実はかなり大きかった。」

「現存している千摩邸と比べても土地的にはさほど差はないのであ
る。」

「ちなみに千摩邸の広さはごく一般的な高校と同じ程である。」

「ただ、雨河家の土地は広いのだが、孝樹の父親が『家は一般家庭
程の広さで十分だ』と言ったことにより、土地の割には家が小さい。」

それでも一般家庭よりは大きかったりするわけなのだが…。

「よし、これで終わりかなかなー」

「そうだな、んじゃあいつら出るまでどうする？」

「当然決まってる。腕相撲しようぜ」

「う、腕相撲かー。よし、良いだろう。いざ勝負だ」

こうして男二人は腕相撲を始めた。

同じ頃、着替えを取りに行った優華たちは廊下で合流、一緒に下に下りた。

「私先に入るからちょっと待ってて」

そう言い残してお風呂場に向かおうとする優華の肩をガシッと掴み、引き止める。

「良いじゃない。一緒に入るうよ」と言う。

「ハアアアアアアアアア？」

優華は顔を真っ赤にして驚いた。

しかし、紗美は「良いじゃん、女同士なんだし」と優華の手を今度は優しく掴み、お風呂に向かった。

脱衣場に入ると紗美はサクツと服を脱いだ。

その姿を見た優華の第一心情は、恥ずかしいとか何コイツとかそんなものではなく、ただ純粹に“ま、ま、負けた”であった。

確かに負けているかもしれない。ただ、実際は、「うーん、うん、紗美だね」くらいなのだが、それでも、そんな些細なさでも、優華は敏感に感じ取り、その大いなるコンプレックスによって濃い敗北感に浸っている。

しかし、紗美はそんな感情を優華が抱いているとは全く気づかず、早く脱いじやいなよ、と優華の服を脱がしにかかる。

「ちよっ！あんた何してんのよ、放しなさいよ。うわっ！何他人の服をつ、ちよっ、やめてつて、ギャアアアアアア」

当然抵抗はする。

するのだが、こう言う時何故か力が強くなる紗美には勝てず、服を脱がされてしまった。

「さっ入ろう、孝ちゃんが用意してくれたんだし」と再び優華の手を引いて浴室に入った。

この浴室は二、三人なら何の問題もなく入れてしまう。

「先に私が洗う」と優華が洗い始めた。

紗美はその後ろで何も言わずただ立っていた。

そして、優華は洗い終わり、紗美と代わって浴槽に浸かった。

とても気持ちの良くなる温度だった。

暑くもなく冷たくもなく、まさしく適温だった。

おもわず、はぁー、と幸福感で一杯のため息が漏れた。

すると、紗美はクスクスと笑いながら頭についたシャンプーを洗い流し、シャワーを止めて顔を手で拭い、額に手をあてそのまま上へ。

多少色っぽく髪を束にする。

「何なのよその笑いは。何なのよ、その行動はアアアア」
半分泣き、半分キレ気味に言い募る。そしてジャンプ。そのまま
紗美に絡みつき、体の自由を奪う。

「ちよっ、放してよ。危ないじゃない！放してって言って…キャッ
！どこ触ってんのよ、放しなさいってちよっともう」

優華はちよこまかと動き回り、どんどん精神力と体力を紗美から
奪い去っていく。

とうとう疲れ果ててしまい、何を思ったのか まー苦しくて死に
物狂いだっただのかもしれない。紗美は大きな声で、孝ちゃーん助
けてー、と連呼し始めた。

「ちよ何してんのよ！呼んだら来ちゃうじゃないの。放すからスト
ップストッププウウウ」

焦った優華はおもわず紗美の口を塞ぐ、がしかし、口と一緒に鼻
まで塞いでしまう。

紗美は少しずつ呼吸が苦しくなっていく。

そして酸欠状態に。紗美は体の力が抜けてゆき、その場に崩れる。

その時だった。事が起きてしまったのは。

何と紗美に呼ばれた孝樹がやって来てしまったのだ。

「おーい、呼んだか？」

そう脱衣場から声がした瞬間、優華は飛び上がった。

当然だろう、目の前には脱力状態の紗美、一つ扉を挟んだすぐそこには孝樹、非常にまずい。

「おい、大丈夫か？」

現状を全く知らない孝樹はなおも問いかける。

優華は悩んだ。悩みに悩みぬいた結果、

「なっなっ何でもないからあっちに行きなさい」と言った。

「命令かよっ！ ったくわーたよ、行くよ」

孝樹は脱衣場を出て行った。

とりあえず、作戦成功である。

次の問題は目の前で動くことができなくなってしまった、（とうか、動けなくした）紗美をどうするか。

しかし、優華はちゃんと考えていた。

まづ、紗美をお風呂から脱衣場に運ぶ。

その次に体を拭き、服を着せ、準備完了。

仕上げは大きな声で、「孝樹来て、コイツを運びなさい」と叫ぶだけだった。

そしてここまでは成功。

ただし、ここからが失敗だった。

その声に驚いた孝樹がやってきたのだが、脱衣場の扉を開けたかと思うとすぐに閉め、

「いめん、わざとじゃないんだ、わざとじゃー」

そう言って引き返していった。

優華には何が起きたのか全く理解できなかった。
だがしかし、理解していた者が一人いた。紗美である。

彼女は痺れて動きにくいにもかかわらず、力を振り絞ってこう言った。

「あ…あ…あん…た、服…き…てな…い…」

そう言い残して紗美は力尽きた。

一人残った優華もその言葉でようやく事態を把握した。
紗美に服を着せることに集中し過ぎて、自分はタオルを巻いただけだったという事に。

さらにいつ起きてしまったのか、挟んだはずのタオルの端が外れていて、自分を申し訳程度にしか巻いていなかったのだ。

おもわず叫びそうになるが、グッとこらえる。

自分の服をさつと着て、全速力でその場から逃走。リビングを通り過ぎ、孝樹の部屋に逃げ込む。

その際、リビングを通り過ぎる時、二人に紗美の事を一瞬で伝えたのは優華が真面目だからだろう。

「一体何があつたんだ？千摩は」

壮汰はすごく不思議に思っていた。

もちろん孝樹に聞くのだが、答えられるわけもない。

結局その夜、優華はおりてこなかった。

したがって、孝樹・壮汰・紗美の三人で勉強会を開くことになった。

二時間ほど、壮汰に詳しく聞きながら、三人は真面目に勉強をした。

不意に時計を見ると十二時をさしていた。

「うわっ、もう十二時じゃん」

孝樹が唸った。

「そろそろ寝よう。明日も学校あるんだし」紗美はそう言うところささと勉強用具を片づけ始めた。

「同感だな、寝るか。んじゃ本日はかいさーん」壮汰も片づけ始める。

もちろん、孝樹も片づける。

そこで孝樹は大変なことを思い出す。 壮汰をどこで寝かそう。

「そういや、俺どこで寝るの？」

ナイスなタイミングというか何というか、とりあえず考えていたことをそのまま孝樹は聞かれる。

「そうだなー、ちょっと待て……」

孝樹は考えた。個人的にはどこでも良いんじゃないか、とは思いますが、やはり男女の同室は恐らくまずいだろう。(あれ？でも俺って女子と一緒に部屋じゃね？てか、二人とも時々一緒に寝てね？あれ？俺ってなんなの？)

その時、我にかえった。

違うそこじゃねーよ！うーん、どうしようか。いっそのこと壮汰を優華のところへなんてどうだろう。

悩む。すると横に紗美が来た。

口を耳元に近づけると、

「千摩さんと吉原くんを一緒につて考えてるのかもしれないけど、それはやめた方が良くないよ?」と言った。

「えっ?何で?良くないか?」

「ダメだよ。孝ちゃんは千摩さんと一緒に寝なさい。吉原くんは私が請け負うから」

そう言い残して紗美は壮汰に軽く事情を話したのか、壮汰は頷き、オ・ヤ・ス・ミィーと言って紗美に連れられて行った。

残った孝樹は明日の弁当や朝食の準備だけある程度して、自分の部屋(ほとんど優華に占領されつつある)に戻った。

部屋に入ると、孝樹の布団で優華が寝息をたてていた。

正直どうしようと考えた孝樹であったが、相手は眠っている訳で、起こさぬようにそっと布団の中に入った。

「さつきはよくも見てくれたわね」

孝樹は飛び上がった。どうやら優華はずっと起きていたようだ。

「いや、あれは不可抗力っていうか、お前が呼んだからであって…」

すると、優華はこちらを向いて何故かクスクスと笑い出すのであった。

孝樹は驚いた。

優華なら間違いなく殴るか蹴るかすると思ったのだ。

「何笑ってんだよ、笑うとこじゃねーだろ」

「ごめんごめん。何かテンパってるなーと思って。さっきの事は私も悪いからもう良い」

そして再び反対側を向いてしまった。

しかし、怒っているわけではないようだ。

声もいたって穏やかだし。

「孝樹、おやすみ」

そう言い、優華は夢へと落ちたようだ。

孝樹は再び驚いた。

今までに優華から“おやすみ”などと言われただろうか。

おもわず孝樹は優華の顔を覗き込む。

するとそこには人形のように白く、美しい“笑顔”の優華がいた。

第5話 <夢とテスト・後編>

陽光がさんさんとさし始めた時、彼は目を覚ました。

刹那呆然としていたが、不意に横を見た。

そこには未だ眠っている優華がいた。

その顔を見て彼は安心した。布団から出て一階へ下る。

「おはよ、孝樹」

突然の挨拶。咄嗟に正座をして額をガンツと床にぶつけ、

「おっおはようございますっ」

今にも千円を差し出さん程の勢이었다。

「どっどっしたんだ？孝樹。別に挨拶しただけなのにー」

そう言っても、手は千円に延びていく。

しかし孝樹はカメレオンの捕食活動並みの速さで壮汰の手首を力強く握る。

「そうはさせねーよ。こいつぁ俺の千円だあああああ」

「いだだだだぎゃあああ」

壮汰は悲鳴をあげ、千円を諦める。

しかし、それから一週間、壮汰の手首には手形が紫色で残ってい

た。

「つーか、こんな朝早くに何して……ホント何してんだよ!!」

目の前の変人 手足に五キロずつ重りをつけ、秒速一回のペースで腕立て伏せをしている壮汰 に対して言い放つ。

「何って決まってるだろう？毎朝してる筋トレさ」

この上なく爽やかな、それでいて人を彷彿とさせる笑顔である。それから五分間くらいだろうか、ひたすら腕立てをする。

「コイツ化けもんじゃねーの？」と思っていると終わったのか立ち上がり、置いてあったタオルで体を拭くと、そのまま床を拭く。

そして上着を羽織ると朝ごはんや弁当を作っている孝樹に、ランニング行ってくるぜえ、と言って飛び出していった。

孝樹は何も応えることが出来ず、ただ食事の用意に精を出した。付け加えるならば、家事全般をこなしているのはこの孝樹である。

すると玄関が開く音がした。

孝樹は不審に思い、玄関が見える廊下に出てみるとそこには……壮汰がいた。

「お前、ランニング行っただんなじゃなかったのか？」

「行ってきたさ、こっから学校までの往復。とりあえず、シャワー浴びるぞ」

そう言って壮汰はお風呂場へ行った。

孝樹は黙って台所へ、朝食の続きを作り始める、がしかし、

「あいつって一体何なんだよー、何がしたいんだよおおお」

おもわず叫んでしまった。

それが原因かどうかは分からないが紗美が起きてきた。

「何叫んでるのよー、目が覚めちゃったじゃないの」

「いや、すまん。ちょっとわけの分からないものを見てしまったもんで」

「どうせ、壮汰が両手両足に重りでもつけて腕立て伏せなんかしてたんでしょ？んでもってその後ランニングしたんでしょ？予想くらいつくわ」

驚くほど、というか見てたんじゃないだろうかとも思える。

恐るべし直感というのだろう。

そんなことを考えていると、紗美は食事をする時の自分のポジションに座った。

そして手に一本ずつ箸を握り、孝樹の方を無言でじっと見る。

「ちょっと待ってって、優華起こしてくっから」

孝樹は慌てて自分の部屋で未だ眠っている優華のもとへ向かった。ちゃんと階段の上に落ちているゴミも見逃さず拾う。

部屋に入ると幸せそうな寝息が聞こえてくる。

孝樹はゆっくりと布団に近づく。

ちなみに孝樹の布団はベッドで、一応二人用だ。

更に加えるならば、優華の部屋もベッドでこちらには屋根のよう
な物がついている。

これは孝樹の母親の気まぐれで買ったものだ。

もつとも今は優華の服が散乱しているだけなのだが。

優華をゆすり起こそうと孝樹はする。

すると、寝ぼけているはずなのに強烈なパンチを孝樹は腹部に受
けた。

「なかなかやるじゃん、コンチキショー」

半分泣きながら孝樹は優華が被る布団を高々と掲げた。

しかし、ベッドの上には足しかなく、中腰姿勢のまま布団にくっ
ついている。さすがに呆れてしまう。

「お前起きろよな、てかしぶとすぎだろ……」

ため息が漏れてしまう。

それが優華に聞こえてしまったようだ。

優華は布団から手を放してゆっくりベッドの上に仁王立ち。

気のせいか、背中からは禍々しいオーラのようなものが見える。

孝樹はまた血の気が失せていくのを感じた。

「今ため息したわね？私に、この私に」

このままじゃオっオっ俺の生命いのちぐわあああああ、と後退りし始
める。

それに対して今にも草食動物を襲おうとしている肉食動物のよう

に目をぎらつかし、詰め寄る。そして……

「いたたたたた、ごめん、ホントごめんって、許してえー」

草食動物が肉食動物に捕まった。

孝樹は優華に捕まり、体格差がかなりあるはずなのに、小柄で細い優華にコブラツイストをがちりかけられる。

孝樹はみるみる顔色が悪くなる。

逆に優華はみるみる笑顔になっていく。

そこへ天の助けがやってきた。

「ちよつと孝ちゃんおーそーいーよー、お腹へったよー」

業を煮やした紗美が二人を呼びに来たのだ。

そして彼女は目の当たりにした。

二人のプロレス状態を。

「ごめん、部屋間違えた」ボタンともの凄い勢いで扉を閉める。

「間違えてない、全つ然間違っていないから助けて。ほんつとた……た……たの……む」

ついに孝樹は人間の限界に到達する寸前まで来てしまっている。

孝樹は呼吸困難に陥った。

加えてコブラツイストによって神経や関節が麻痺し始める。

その事を知ってか知らずか、紗美はノリツツコミの如く再び扉を開けて、中に飛び込み前転の要領で入ってきた。

中の二人は突然の事に驚いて硬直する。

「私の孝ちゃんに何してんだああああ」

一瞬、孝樹の部屋がこの地球上から孤立した。
と言うか、静止した、と言った方が正しい表現かもしれない。
そして学生にとって貴重な朝の五分がこれに使われたのは恐らく
言うまでもないことだろう。

その頃、壮汰は未だ頭や体（主に頭が九割ほどなのだが……）を
全力で洗い続けていた。

「ほんつと手加減とかしないよな」

半分体を引きずりながら階段を一段ずつゆっくり下りていく。

そのすぐ後ろに紗美、それから少し離れた所に着替えを済ませた
優華がムスツとした顔で続く。

結局、紗美により静止されたおかげでコブラツイストも解け、な
んだかんだで終わっていったのだ。

「大丈夫？孝ちゃん。フラフラなんだけど……」

「な…なんとか大丈夫かな。まーコブラくらってる時はさすがにあ
の世から迎えが来たかと思っただけど」

「あつあんたが悪いんだからねっ！人の寝込みを襲おうとするから。
私は悪くないわよっ！」

孝樹はこつこつというのが負けず嫌いと言っのだろうかとある意味感心
してしまった。

しかしそこで、誰が襲うかよ、誰が！と反論すると、横にいた紗
美が、そうよ、孝ちゃんが襲うのは私だけなんだからねなどと付け

加える。

孝樹は冷静に、そもそも誰も襲わないっつーの、お前もなと更に付け加えた。

廊下を渡り、リビングを通り過ぎ、台所に入った。

出来上がった料理はほとんど冷めてしまい、アツアツだった料理だけがほんのりと湯気をあげている。

孝樹は二人を座らせて料理を少しずつ温めていく。

その時、優華があることに気づいた。

「そつえば、吉原くんってどこいったの？」

「あいつなら確かシャワー浴びるって言ったと思うけど……」

そこに、「俺ならもう出てるぞ？」

シャワーを浴びて戻ってきた壮汰がそこにいた。

しかし、孝樹の言葉が止まったのは壮汰が現れたからではなく、むしろその姿にあった。

何故か壮汰は腰にタオルを巻いただけという姿でいるのだ。

更に腰に手をあて、仁王立ちでそこにいる。

ちなみに普段壮汰は眼鏡を掛けている。

視力が悪いというのもあるのだが、本人曰く、一番の理由は眼鏡掛けてると学力が上がる気がする、らしい。

今はその眼鏡を外してスポーツマン的な雰囲気醸し出している。いつもは制服に隠れて全く分からないただ痩せているような外見も、服を脱ぐと意外に筋肉質な体をしている。

優華はこれを見て顔を真っ赤にしている。

「ちよつ、お前さー、服着てこいよ」

「いやーすまんすまん。服を取ってくるのを忘れていたのだ、ハッハッハッハッハッ」

「笑ってなくて良いから早く行けって」

「了解しました、隊長」

ビシッと敬礼をして、自分の鞆がある紗美の部屋に向かおうとする。

そこで事件は起きてしまった。

壮汰のタオルが外れてしまったのだ。

ある意味で声にならない悲鳴が聞こえる。瞬間的に孝樹は動きだし、タオルをさっと拾い、壮汰に巻きつけた。

そして何事もなかったように階段の方へ彼の背中を突き飛ばす。

しかし、時既に遅しというやつだ。起きてしまったことをなかったことに出来るはずもないわけで……

その後は全員が重く澱んだ空気の中、黙々と各々のすべきことをこなしていった。

端から見れば地獄絵図とも言えるかもしれない。

そして時間が来ると、孝樹と壮汰、優華と紗美でペアを組み、学校へと歩み始めた。

「オッス、雨っちー」

「よっ！孝……どうした？何か顔色悪くないか？」

小田野と一村が教室の入り口にある席に座ったまま孝樹の顔を見て聞く。

「だっ大丈夫だ…問題ねえー」と孝樹は応える。

その間に優華、壮汰、紗美は自分たちの席へ早足で去っていく。それを見ていた一村が、「やっぱ何かあった？」と聞く。

「ちよつと…な」

孝樹はそれ以上は語らず、自席へ向かった。

小田野と一村には何が何だか全く分からなかった。

唯一分かったのは、今あの四人が険悪なムードであるという事だけだろう。

しかしその険悪も一日で解消され、日常が再び戻ってきた。

それから前期中間考査当日まで、特に騒動は起こらず（壮汰の暴走は相変わらず続いているのだが…）平凡に勉強し、学力をつけていった。

そして当日の朝。

外は生憎の雨である。それもよりによって豪雨。しばらくは止みそうにない空模様だ。そんな空を一人窓から眺め、ため息をつく。

「最っ悪」思わず孝樹は愚痴ってしまう。

「まーまー、仕方がないだろ？自然現象なんだから」

「うわー、吉原くんが真面目なこと言ってるよー」

「……………」

リビングに座り、そんな孝樹を見ている三人が言った。一人は何も言っていないのだからこの表現は変かもしれない。

孝樹は空を眺めるのを止め、三人の輪に加わる。そして中心の小さな机を挟んで四人は輪を組む。

「それじゃ、前期中間考査赤点ゼロを目指して。行くぞー」

「おー！！」

四人は机の上で手を重ね、力を込めてお互いの健闘を祈って叫ぶ。そうしてお互いの顔を見た後、自分たちの部屋に荷物を取りに行く。

全員が玄関に揃う。一人ずつ靴を履き、外に出て全員が出ると孝樹が家に鍵をかける。

雨は相変わらず激みきつた曇天から降っているが、今の孝樹たちにはそんなもの何でもない。

孝樹たちの頭の中にあるのは唯一考査だけであった。

教室に入ると、中は勉強派と会話派に分かれていた。

「オッス、孝」

「おはー、雨っちー」

一村と小田野が近づいてくる。

孝樹は手を挙げて応えた。

しかし、他の三人は少し微笑んで自分たちの席に行ってしまった。

「俺たち、何かした？」と一村が聞いた。

「いや、してねーよ。一村たちがどうのってわけじゃなくて、俺たち赤点ゼロ目指してるから……」

ちよつと困ったような顔をした。

一村たちは、そうか、そういう事か、と理解してくれたようだ。

そして孝樹たちが会話をしている間に、優華たち三人は鞆から勉強道具を取り出してひたすら復習していた。

ただ、優華と紗美は普通に勉強しているのだが、壮汰は……何と
いうか、うん、ひたすら筋トレをしている。

残念なことに、孝樹他二名はその壮汰の行動を見てしまった。

「相変わらず、だな」

「あつああ、そうなんだよ」さすがの孝樹も呆れてしまう。

壮汰のせいでやる気とかそういうものが全てどこかへ失せてしまった。
つた。

そんな三人の事などお構い無しに壮汰は勉強しながらの筋トレに精を出している。本当にいろんな意味ですごい男である。

そして雰囲気を乱されてしまった孝樹たちは散っていく。

孝樹は席に着くと落ちてしまったやる気を何とか立て直し、復習し始めた。

とりあえず今日行われる現代文と理科から手をつける。
考查と言っても授業で習った内容が基本的に出される。

つまり、ノートを見返したりすれば、だいたいは解けるはずである。

そして時間が来るまで、四人はそれぞれ一心不乱に勉強をした……

これより報告致します。

一日目が終了して、今皆が集まりました。

「ふんっ、これくらいなら楽勝楽勝」

余裕たっぷりでふんぞり返る優華が言います。

俺、壮汰、紗美はホッと一安心しました。

二日目

今日はどうやら後ろで何か起きたらしいです。

話を聞くと、壮汰の作業みたいです。

調査中は番号順なのですが、一番後ろの席に壮汰は座っています。だから出来たのでしょうか。

監督官の教師が居眠りしている隙に机の上で倒立したり、腕立て伏せをしたりしたらしい。

ちなみにバレませんでした。

更に加えて、壮汰は一応真面目な奴のはず……
調査が終わり、再び集合しました。

「だ…だいじょ……つぶ、まだまだ余裕」

冷や汗かきながら言う台詞じゃありません。

俺たちは若干心配になりました。

三日目

今日は教師がやってしまいました。

考查の時に配られた問題を見たところ、そこに見覚えのある絵がありました。

その絵は二週間程前でしょうか、優華と紗美が己の絵画力を競い合って描き上げたものでした。

しかも、どちらの絵も理解できるようなものではなく、クラスの大半が不正解になった事は言うまでもないでしょう。

その日が終わり、再び集合しました。

「まだまだよ、まだ楽勝なんだからね！」

昨日の状態につけ加えて、今日は息も上がっていました。

俺たちは一層心配になりました。

最終日

朝の教室に邪心だとか闇だとか呼ばれるものを纏わせた女子がいました。優華です。

どうやら疲労が限界寸前まで来ているようです。

さつきからずっとイライラしています。

相変わらず息は荒く、まるで獣のようです。

それでも本気で勉強しています。

本日は集まらず、皆バラバラに帰ってきました。

「さすがに疲れたわ」

とうとう目の下にクマができました。

俺たちは優華の健康が何だか心配になってきました。しかしついに考査が終了しました。

これにて雨河孝樹の報告を終了します。

その夜、無事(?)に考査を潜り抜けたと言う事で焼き肉パーティーが雨河家で開かれることになった。

ざっと見渡して二十人前はあるだろうか。

すべて優華の父・春助が持つてきてくれたものだ。

ただ四人で二十人前はさすがに多すぎる。

なので現在雨河家には孝樹たち四人以外に、一村や小田野、南に佐能^{さの}、琴音に羽奈までやって来ている。

いつもの机では小さいので今日だけ特別にリビングのソファを廊下に出し、広くなったそこへ優華邸から借りてきた大きな机を運び入れた。

時刻はまだ七時、これから盛り上がっていくところだ。

部屋の中は焼かれた美味しそうな肉や野菜の匂いで一杯になっている。

同様に話し声も絶えることなく部屋に響き渡る。

「みんな一人一杯ずつコップを持ってくれ、乾杯しようぜ?」

そう言って孝樹は壮汰を伴って一人十杯ずつサイダーの入ったコップをお盆に乗せてリビングに入ってきた。

その時、「あの一、申し訳ないのですが、お茶を頂けないでしょうか?私炭酸系^{わたくし}のものが頂けませんので」とすごく困ったような、本当に申し訳なさそうな顔をして琴音が謝った。

「いついえ、全然構わないツよ。今取ってきますから」

机の上にまだ数杯残っているお盆を置いて再び台所に行こうとした。

「あっあの、わっ私もお茶にしてもらいたいです」

不意に琴音の隣にいた羽奈が言った。

そして焦っているのか、はわわわと言っている。

「了解。他にお茶がいい人いる？」

すると南禅も手を挙げた。

孝樹はそれを確認して台所に行った。

それを見送って琴音はコソツと「羽奈ちゃん可愛いですわー、憧れの人を見て恥ずかしがられて」と言った。

「はわわわわ、そんなことないもん」

顔を真っ赤にして手をバタバタさせている。

いろいろと可愛い人である。

「お待たせしました」

孝樹がお茶を持ってやって来た。タイミング悪く、羽奈は台所に背を向けて立っていたため、気配に気づかなかった。

「ほええええー」

ビクツと飛び上がり、その場に腰から崩れてしまう。
近場にいた壮汰と優華が振り向いた。

「大丈夫か？」

「大丈夫ですわ。後は私にお任せくださいな」

そう言っつて琴音は羽奈に肩を貸して隅の方に連れていく。
それを見ていると隣に壮汰と優華がやってきた。

そして二人もそれを見ている。すると視線はかえず、二人は話し出す。

「やってしまったな、孝樹」

「やっっちゃったわね、孝樹」二人が同時に言った。

「なっ何をだよ、俺は何もしてねーぞ」とそれに返す。

「ああいうタイプに後ろから声かけるのはまずかったよな」

「まずかったわよね、それに必要以上に驚く意味があるみたいだしね……」

孝樹たち二人には彼女の言っている事の意味がイマイチ掴めない。
恋愛面に疎い二人である。

その後、どんどんパーチーは盛り上がっていく。
二十人前あつた料理も一時間程でなくなつた。

なのでそれからは皆で絨毯の上に座り、テレビを見ながら雑談をする。

孝樹も例外ではない。

一応雑談の輪には入っている。

しかし彼はそのほとんどをまともに聞いていなかった。

彼の視線はある一点・体調の良くなってきた羽奈の隣・に向けられていた。

けれども自分からそこに話しかけたりはしない。

なぜなら憧れの存在だから。

その孝樹の行動に二人も気づいていた。

優華と紗美だ。

二人は近づき合い、小声で話す。

「あいつすごく見てるわ」

「見てるね、どうする？」

「こっすんのよ」

優華はどこに隠し持っていたのだろうか、懐から輪ゴムの束を取り出した。さらにその中から三つの輪ゴムを外すと再び束を懐に戻した。

そして輪ゴムで狙いを定める。

照準を絞り、輪ゴムをウンスツと伸ばしていく。

伸ばすと指が震え始める。

すると優華の目がカツと見開く。

次の瞬間、撃ち放たれた輪ゴムは真っ直ぐ孝樹の首筋へと飛んでいく。

三つの輪ゴムは一秒も経たずに連続で放たれたため、間髪入れずに当たり続ける。

即座に孝樹は唸った。

「いってー、何だ？輪ゴム？」

ハツとなつて孝樹はゆつくりとだが確実に優華を見る。

そして彼の顔は青ざめていった。なぜなら優華の口が動いているのだ。

その口が言ったもの、それはア・ト・デ・コ・ロ・ス、であった。孝樹は体が震え出すのを感じた。

そこでようやく隣の紗美にも気がついた。

彼女は優華のように口には出さず、表情で怒っている。

孝樹は思った - ああ、俺、死亡フラグたってんじゃない -

それから孝樹は恐怖で二人から目が離せなくなってしまった。

気づくともう夜中の十一時になっていた。

「さすがに帰った方が良いんじゃないかねーの」と孝樹はその場にいる皆に提案する。

「そうね、そろそろ帰りましようか。海花ちゃん」南が佐能に言った。

「え？あーそうね、そうしよっか」ちょっとあたふたとしつつ海花が応える。

二人は立ち上がり、荷物をまとめ始める。それを見ていた琴音と羽奈も立ち上がり、荷物をまとめ始める。

「二人も帰るのか？」ソファーに座る壮汰が振り返って言う。

「ええ、そうさせていただきますわ。まだやらなくてはいけない事も御座いますし」

「わつ私も家の事しなくちゃいけないから失礼します」

二人はそう言って玄関に向かう。南と佐能もそれについて行く。しかし竜一と光介はまだ座ったままテレビを見ている。

どうやらこの二人はまだまだ帰る気がないらしい。孝樹は二人の家がここから近いのも考慮して、まっいいか、とそれを流す。その時孝樹はあることを思いついた。

「そうだ、時間も遅いしあの四人送って行かなくて良いのかな？」

「確かにそうだな、んじゃ途中まで送ってくか」とソファーから立ち上がり壮汰が答えた。

「お前らまだ帰らないんだったら優華たち頼んでもいいか？」

「おつ良いぜ？」

「まっかせろーい」と二人は手を挙げた。

孝樹はすごく不安になった。自信満々で手を挙げている分、不安が増していく。

その時壮汰が肩に手を置いた。壮汰を見ると彼の顔には『大丈夫！』と書いてあった。主に額の中心に赤ペンで。

孝樹はたった今まで心の中にあつた不安が消えていくのが分かった。不安が消えると壮汰の行動を笑わずにはいられなくなった。や

つぱり壮汰は良いヤツだ。そうして、んじゃちょっと送ってくる、と優華たち四人に言った。

皆笑顔で手を振った。

玄関から出るとまだ入口に彼女たちはいた。どうやら話し込んでいたらしい。四人の顔を街路灯が優しく照らし出す。

「あら？雨河くん、吉原くん、どうかしたのかしら？」

目線的に一番初めに気づくことの出来た南が言う。その声に今まで色んな話をしていた他の三人も孝樹たちの方に向く。

孝樹は軽く手を挙げて、「送ってこうかと思つてさ」と言う。

「ちなみに方向違うから俺も来たよ」と壮汰が孝樹の後ろから言った。

「そう、んじゃまた学校でねっ」

「学校で」

佐能と南が歩き始める。

「んじゃ俺あの二人の方行くからそつちは任せるぜー」そう言つて壮汰はスキップで追いかける。

「んじゃ…俺たちも行くか」孝樹は壮汰の方から視線を戻して二人に言う。

「ええ、そうしましょう」

「……」

琴音と羽奈が言う。ちなみに羽奈はずっと俯いている。そして三人は横一列になって街路灯だけの暗い道を歩き出す。二分ほどたっただろうか、大通りに出た。深夜だと言うのに昼間のように車が往来している。

「この辺りまでで十分ですわ」琴音が孝樹をちらつと見上げて言った。

孝樹は辺りを見渡した。確かにこの大通りは明るい方だ。車のライトや街路灯の明かりがある。

しかし、一つ裏の路地に入ればその明かりも川辺を飛ぶ蛍のように点々としかありはしない。

「いや、ちゃんと送っていくよ」優しく微笑んで孝樹は言った。

「大丈夫ですか？優華さんたちはお家でしょう？」

「大丈夫、一応竜一と光介に頼んできたし」

「そうですか、では行きましょうか」

再び歩き出した。しかし、十メートル程歩いた時に一人足りないことに孝樹は気づいた。

「あれ？倉塚は？」

「あら？」

倉塚羽奈がいなくなっていた。周りを孝樹は見回した。

こんな暗い中を探すのはほとんど無理なんじゃないだろうか、と孝樹が思っていると、琴音が一点を指して「あちらに……」と言う。その一点をよく見てみると、人が立っているのが見える。残念な事に光の届かない場所なので誰かまでは分からない。それにも関わらず、琴音は躊躇うしぐさなど全く見せず、「羽奈ちゃん」と言った、と言うか叫んだ。

「ほえっ!？」と明らかに驚いた声が聞こえてきた。

そしてその人は孝樹たちの方に向かって走ってくる。

三メートル程まで来たところでようやくはつきりと羽奈だと分かった。

ただ、分かった瞬間孝樹の視界から彼女は消えた。孝樹は起きた事を理解してゆっくり下を向いた。

するとそこには手を伸ばして倒れている羽奈がいた。俗に言うドジっ娘なのだろう。

「大丈夫か？豪快に転んだけど」

「エへへへへ、大丈夫だよ」

そう言っ羽奈は立ち上がろうとする。

しかし足首に力を入れた瞬間、彼女は唸って歩道に片膝を着く。

どうした、と孝樹が近づいていくと、何でもない何でもない、と彼女は手を振って言った。

けれど孝樹の目にはハッキリと羽奈が左足首をおさえているのが見えた。

「今転んだ時に痛めたんじゃないの？」

「だっだいじょうぶだよ」

「大丈夫って立てねーじゃん」

あたふたしている羽奈を見ると、何だか助けてやらないと言う感情が孝樹の心に浮かんだ。

孝樹は羽奈の前にしゃがむ。

「乗れ。このままじゃ遅くなる一方だし、親が心配するかもしれねーぞ？」

「えっ？いいよいいよ、私きつと重いから良い」

「気にすんな、俺も気にしない。それより今は帰ることが最優先だ」

彼女は動揺していたが、観念して背中に乗った。乗せてみると驚くことにすごく軽かった。

「倉塚さー、めちやくちや軽いな」

「ほえっ!?!」かなりの不意打ちだったようだ。羽奈の体は次第に震えていく。

「ごっごめん、何か俺、変なこと言っちゃまったみたいで」孝樹が慌てて訂正する。

「そっそんなことないですよ」

そうして二人が互いに謝っているのを外側から眺めている琴音は頬に軽く手を添えて、悩ましげに、デジカメを持ってくるべきで

したわゝ、と考えていた。

十分程歩くと羽奈の家に着いた。

家の中はさすがに暗くなっていた。当然だろう、既に深夜なのだから。孝樹は羽奈を玄関に連れていく。

そして、鍵を開けさせて中に運び込む。

「わざわざありがとございます」と何度も何度も頭を下げる。

孝樹は軽く手を挙げて、「いやいや、でも大丈夫なのか？色々」と言って羽奈の足首を見る。

「大丈夫です、ちゃんと手当てしますし、ありがとございました」とまた頭を下げる。

「それなら良いけど、んじゃ行くわ。また学校でな」そう言って向きを変え、歩き出す。

「はっはい、おやすみなさい」またまた頭を下げた。

「おう、お休み」孝樹は振り向かず手を挙げた。

孝樹の前では琴音が、おやすみなさい、と上品に頭を下げた。

孝樹が入り口の門を出ると同時に後ろでも扉が閉まった。

そのことによって今ハッキリと孝樹と琴音を照し出すのは等間隔で路上から伸ばされた街路灯だけとなった。

さらに五月も直に終わり、六月に入るといふのに何となく寒い。

例えるなら、幽霊とか妖怪てかが一番出やすそうな不気味な雰囲気だ。

その時ふと横を見た。何となく震えているような琴音が孝樹の目に入った。

孝樹は無いよりはましかな、と思い、自分の着ていた上着を琴音に羽織らせる。

「ちょっと寒そうだから、こんなんで良ければ羽織つてると良いよ」と何となく驚いたような表情をしている琴音に言った。

もしかして嫌だったのだろうか、迷惑だったろうか、と思っっている事が顔に出てしまったようだ。

琴音はとても上品で優しい微笑みをして、「ありがとございませす。とても温かいですわ」と言ってくれた。

孝樹の顔は安堵の表情を隠しきれずに綻んでしまう。

琴音はそれを見て、どうかしました？、と聞いてくる。慌てて、何でもありません、と応える。

そうして二人は夜道をたわいもない会話をして歩いた。あまりにも話し込み過ぎていつの間にか琴音の家の前に着いていた。

孝樹は自分の目を疑った。なぜなら琴音の家が優華の家ほど大きくはないにしろ、一般的な家と比べれば間違いなく大きい。恐らく孝樹の家とかわらないだろう。

「ほんとにここが家なんですか？」思わず聞いてしまった。

「はい、そうですわ。こちらが私、和泉院家の本宅ですわ」屈託のない笑顔で返された。

「へ、へ」孝樹はもう一度和泉院家の本宅とやらを見上げる。

やはり俗にいうお金持ちなんだ。俺とは住む世界が違うな。そんなことを思っていると、琴音がゆっくりと孝樹の視界に入ってくる。

「大丈夫ですか？」と琴音が心配になり、聞いた。

「え？あつ大丈夫です、ありがとうございます」慌てて答え、琴音に焦点を合わせる。その時孝樹はドキツとした。

目と鼻の先程の距離に琴音がいたのである。

琴音はすごく肌が白く、容姿で例えるなら『かぐや姫』が一番近いだろう。

当然校内においても人気は高く、噂では週に一回は告白され、その全てを断っているらしい。

ちなみに孝樹もその一人であるが、告白まではしていない。そんな勇氣は持っていないし、このままの関係でいたいから。

一瞬見とれてしまうが、すぐに驚いて後ずさる。その時不意に足がもつれてしまった。

孝樹の体が徐々に傾いていく。孝樹は思わず手を伸ばしてしまった。

手を出されたのだから琴音はそれを掴んでしまう。

掴んだところまでは良かったのだが、孝樹と琴音では体格差がありすぎた。そのせいで琴音は耐えきれずに孝樹の上に倒れてしまう。孝樹は琴音が掴んでくれたお陰で頭や腰を強く打ち付けずに済んだ。

「イッテ、あつ和泉院さんごめん、大丈夫？」

「ええ、大丈夫ですわ。あつすみません、重いですよ。すぐどきますわ」

「大丈夫つすよ、全然重くないですから」

「……」

琴音はさつと立ち上がり、お恥ずかしい、お休みなさい、と家の扉を開けて去っていった。

孝樹はゆっくり立ち上がり、特に何も言わず、無言で家に帰った。ただその途中で一つだけ思った事があった。

それは、これからどんな顔をして会ったら良いんだろう、という一種の恐怖だった。

家に着くと、もう壮汰は帰ってきていた。そして光介と竜一もまだテレビを見ていた。

「おっ帰ってきたか、遅かったな」

「おっかえり〜雨っち〜」

「お疲れ、孝」

リビングの扉を開けた俺を見て三人が言った。そこで俺は優華と紗美がいらないことに気がついた。

「なあ、優華たちはどこいった？」

「あの二人なら確か風呂に行く廊下で会った時に言ってたぞ？そ

う言えば、一村と小田野に伝言を頼まれていた。えーと、『アンタ
らもし覗いたらぶつ殺す』だったかな」

「俺たちは覗きなんてしないよ」

「そうだと、俺達がするのは“男のロマン”さ」

ああ、こいつらダメな連中だわ、と孝樹はそんな事を言う友人達
をすごく痛い目で眺めた。

壮汰を見ると…こいつはいつも通りだった。

「よっし竜一行つくぞー」

「よっしや〜」ダメな二人はとある特殊部隊の兵士のように「ソコ
ソと隠れながらお風呂場へと向かっていく。

残った孝樹と壮汰はため息一つ、ソファーに深々と腰を下ろし、
テレビを見始めた。

すると二分も経たない内に二人の悲鳴が聞こえ、孝樹たちは廊下
に慌てて飛び出した。

そこには瀕死状態で突っ伏している二人の姿があった。

「なー孝樹、これぞまさしく有言実行と言っただろうな」

「ああ、まー分かった事なんだが、いざこつやって結果を見ると
恐怖心が湧いて、行かなくて良かったと思うよ」

二人は苦笑。さらに額からは冷や汗が流れていく。

恐怖からか、二人は覗き魔共から目が離せない。すると、

「自業自得よっ！私はちゃんと忠告したも…の…」優華の視線は真

っ直ぐ壮汰に向けられる。

話しかけられ二人は優華を見た。

目が合つて二人は絶句した。

優華を見に来たのが孝樹だけだと思つたのか、バスタオル姿で脱衣場から現れた。

“死亡フラグ”というやつじゃ…、と孝樹の脳裏に過つた。しかし、影響力は壮汰の方が強かつたようだ。

優華は黙つてしまい、さつと脱衣場に飛び込んだ。その後すぐに脱衣場から物が落ちる音がしたが、今行けばきつと殺される。

精神的に傷ついたらろう獣は傷つけられた分を上乗せして襲ってくる。

それだけは避けたい、いや、避けなければならない。

「戻つていよう、今関わるよろくなことにならなさそうだ」

「そうだな、ところで孝樹、この変態共はどうするのだ？」

「一応救助してやつか」

二人は憐れな連中を引きずりながらリビングに運ぶ。どうやら完全にノックアウト状態のようだ。

孝樹は光介を、壮汰は竜一をそれぞれ手当りする。

それが終わった時、優華と紗美がお風呂から戻ってきた。

「私たちは悪くないんだからねっ」二人が同時に言った。

「分かつてるってそんな事。ちゃんとこいつらの行動を見てたから」孝樹が言う。

そこで時計を見ていた紗美が、もう日付変わるよ、と言った。それにつられて三人も時計を見た。

たしかに日付が今にも変わろうとしている。

現実の時間に戻り、四人は欠伸をする。

皆同時の欠伸だったので思わず笑いが起こった。

その笑いで気絶していた二人も目を覚ました。

そしてそのまま二人は女子二人に対し、土下座をして、

「すみませんでしたー」と謝った。突然の出来事に優華たちはビクツと驚いた。

「なっなんなのよっ！びっくりするじゃないの、てかしちゃったわよっ」優華は顔を真っ赤にして怒る。

「すみませんでしたー」

再び土下座である。こいつら学習はしないのか？本当のばかなのか？と孝樹は頭を抱えてしまう。そして

「もう良いから帰ってくれよ、夜もおせーしよー」半分投げやりだ。

「そうだな、もう遅いしそろそろ帰った方が良いだろうな」冷静な壮汰が言った。

「確かに、んじゃ失礼致します」

「失礼しやゝす」

二人は立ち上がり、頭を下げ、荷物を持って出ていった。

これで残ったのは特別合宿を行ったメンバーだけとなった。

「んじゃ俺たちも風呂入っか」

「そうだな、入るといたすかのうー」

二人は歩き出し始めた。そこに優華が、私たちは先に寝てるから、と後ろから言った。

孝樹は手を挙げてそのままお風呂に向かう。

しばらくしてお風呂から上がった二人はリビングでサイダーを飲んでいた。

同時に飲んで、プハーと幸福的に息を吐く。

「やっと終わったって感じがするよな」

「しますなー」

「何か色々とありがとな、助かった」

「なんのなんの、気にするなよ」

「そついや考査も終わったわけだし、やっぱり帰んのか？」

「その予定でいるぞ？まーでもここはここで楽しいからなー」

「んじゃ壮汰もここで暮らすか？」

「良いのか？ここで暮らしても」

「良いだろ、別に。まーあいつらにも聞いた方が良いと思うから決定は今度だけだな」

「そーだねー、んじゃ明日聞くってことで良いのではなかるうか？」

「構わんよ、んじゃそう言うことでお休み」

「オツスつ、お休みであります」

孝樹が立ち上がり、寝に行こうとすると壮汰が孝樹の方を向いてどこかで見覚えのある軍曹のような敬礼をする。

孝樹も軽く敬礼して再び部屋に向かう。

部屋に入るとあの寝息が聞こえる。いつも通りの幸せそうな音だ。孝樹は周りをよく調べる。どうやら今日は忍び込んでいないようだ。

孝樹は伸びをして布団の中に入る。その時、優華を起こしてしまった。

「もー、起こさないでよ、良い夢見てたんだから」鋭い目付きで言う。

「じつごめん、起こすつもりはなかったんだ」慌てて謝る。

「分かってるわよ、おやすみっ」そう言っただけでまた深い眠りへと彼女は落ちていった。

再び隣からは心地の良い寝息が聞こえ始めた。

それを聞きながら天井を眺めていると、次第に孝樹も睡魔に襲われ始めた。

雪が降ってる。前にも見たことがある風景だ。と言つか明らかにあの夢の続きだろ、これ。

そんな事を考えながら雪の上をどこへ向かうわけではなくただ歩いていく。相変わらず時間は深夜のようだ。

吹雪いてはいないから歩く分には助かる。しかし行方が分からない以上どうしたら良いのかも分からない。

これが途方に暮れるというやつなのか。膝から体が雪の上に崩れていく。

その時、視界の端に小さな光が見えた気がした。

孝樹は目をよく凝らしてその光の方を見た。

するとそれが懐中電灯だと分かった。

ゆっくりと確実にその光に向かって歩いていく。しかし光はどんどん弱くなっていく。

孝樹は焦った。

孝樹にもよく分からないが、あの小さな光を掴まなければならぬ。そして絶対に離してはいけない気がする。

その思いで心が一杯だ。

歩き続けて後少しの所まで来た。

光はさらに弱くなっていった。待ってくれ、もう少しで、もう少しで届くんのだ。

そして光に触れそうになった瞬間、彼は目を覚ました。

あれは一体何だったんだろうと考え、不意に隣で眠っている優華が目に入った。

孝樹にはあの夢に何か大切なものを感じ取った。

第6話 < 剣術師範にこの俺が? >

考查が終わって数日が経った。

壮汰はあのパーティーの翌日の朝、自宅に帰っていった。しかしそれは荷物を取りに行ったからだ。

優華たちから許しが下り、壮汰の両親からも許可が下りたことにより、これからはこの雨河家に四人が住むことになる。

孝樹たちは壮汰がやって来る日を少なからず楽しみにしていた。

そして次の土曜日、とうとうその日がやって来た。

玄関のベルが鳴り、孝樹が見に行くところには壮汰が立っていた。いつものようによく分からない決めポーズをしている。

「おはよう、壮汰。相変わらずだな」

「オッス、孝樹。俺はいつもどーりだぜー。今日からよろしく、な」

「おう、よろしく。とりあえず荷物中に入れるよ」

孝樹は家の中に荷物を入れるように促す。それに従い壮汰は自分の持ってきた荷物を玄関に運び入れる。

するとリビングから紗美がやって来て、何か手伝うことある?、と聞いた。

「大丈夫かな、俺たちでやれそうだ。ありがとな」孝樹は荷物の量を見て言った。

「分かった、それじゃあ戻ってるから何かあったら呼んで、ね?」

とリビングに帰っていった。

「それじゃこの荷物を運ぶとしますかのう、どこに運べば良いのですかのう？」急に壮汰は老人ぶった姿勢をとる。

「ちゃんと準備しておいたよ、と言うか主に優華の親父さんが…なんだけど」少し目を細めて孝樹は言った。

「そう言えばさ、孝樹ん家、なんかでかくなった？」

「あ…ああ、ちょっとこの数日間色々あって……」

* * *

それは壮汰が帰った日の事。

孝樹たち三人がくつろいでいると、突然孝樹の携帯電話が鳴った。孝樹が電話に出ると、

「やあ、孝樹君。元気にしてるかい？」優華の父親である春助だった。

「元気にしてますよ、春助さんこそ元気ですか？」

「もちろん元気さ。ところで今回電話した一件なんだがね？娘から聞いたんだが、今度新たに同居人が増えるとか」

「ええ、そうですよ。俺の友達で吉原壮汰って言います」

「ほほう、君の友人かね？それなら安心だ。そこでだね、君の家を増築しようかと思うんだ」

「増築ですか！？大丈夫ですよ、それに学校だってありますし、荷物だってありますから。費用だって無いですし」

「お金の事なら気にする必要はない。全額私が出そう、娘もそこが気に入っているようだし。まあ孝樹君が良ければ、なんだが」

「俺は…」

そこで少し考えた。確かに皆でこれからこの家に住むのならこのままでは少し窮屈かもしれない。

でもここは家族三人で何となくとはいえ、今まで暮らしてきた家だ。少なからず思い出はある。

もしここで増築とかしたらそういうのも壊れてしまう、なんかそんな気がするんだ。父さんと母さんの思い出が無くなるようなそんな気がした。

その時だった。優華が孝樹の手を握り、廊下へと誘った。

紗美も一緒に来ようとしたが、珍しく優しく微笑んで部屋に残った。

廊下に出た孝樹たちは階段に腰を下ろした。そして優華は優しく孝樹から携帯を受け取り、

「お父さん？またかけなおします」

そう言って電話を切って携帯を孝樹の手に返した。そうして深呼吸をして、孝樹を真っ直ぐ見つめ、いつもとは違ってとても穏やかに優しく、

「どんな話をして、あんたが何考えてるか、何となく分かってる。」

そのつもりよ」と言った。

どうやら話の内容や考えていることが顔に出ていたみたいだ。孝樹は顔に出してしまったを恥ずかしく思った。

「安心して。あんたが何を選ぼうと私たちは攻めるつもりはないから」

いつもなら絶対に見せない優しい笑顔を惜し気もなく孝樹に向ける。孝樹は一瞬ドキツとしてしまったが、冷静に考え直して、

「一つ真剣なこと聞いても良いか？」と聞いた。

「別に構わないわよ」と優華も返してくれたので、ホッと一安心して、

「優華たちにとって俺って何だ？」と聞いた。

一瞬沈黙が流れたが、優華はゆっくり優しく、

「私にとっても、きっとあいつにとっても大切な家族のようなものかな」と言う。

それを聞いて、そっか、と孝樹は言う。電話のアドレス帳を開いてある人物に電話を掛ける。

「もしもし孝樹ですが、今よろしいですか？そのですね、先ほどの話をお願いしようかと思ひまして。はい、大丈夫です。宜しくお願ひします」

そう言って再び電話を切って大きく深呼吸をした。

「本当に良かったの？それで」優華が心配そうに聞いた。

「ああ、これで良かったんだ。いつまでも過去に囚われてちゃ始まらないよ。それに俺にとつても今の生活の方がやっぱり大切だ。気づかせてくれてありがとな、優華」

孝樹は笑顔で言った。不意の笑顔に優華はドキツとして顔を真っ赤にしている。

「なっなによその笑顔は！フツツ、決心出来たならそっそれで良いのよっ。じゃっじゃあ先に戻るわ」と言い残し、早足にリビングへと戻っていった。

すると優華に代わって紗美がやって来た。

「大丈夫？孝ちゃん。どうやら決まったみたいだけど」と孝樹の隣にゆっくり腰を下ろす。

「ああ、色々ありがとな」

「もう、気にしないでよ。私と孝ちゃんの仲じゃないの。それに孝ちゃんが信じた道でしょ？なら大丈夫よ」

紗美は孝樹の背中を軽く叩いて笑顔で言った。そして立ち上がり、彼女もリビングに戻っていった。

孝樹は大きく伸びをした。そして、いよいよこれからが始まりかな、と思いい二人を追ってリビングに入った。

それからわずか半日で家の増築が始まった

。荷物は春助が連れてきた総勢百人の社員の手によって一時的に用意してくれた千摩邸内の一軒家に移してもらった。

そしてたつた三日で家の増築が終わった。

凄い早さ…と言っかやる気である。

更に家に戻つて孝樹たちは驚いた。

なぜなら大きさが以前の三倍になったような感じがしたからだ。

社員の人たちが荷物を運び入れている時に、玄関の前で並んで立っていた春助に孝樹は聞いた。

「すごく大きくなってませんか？ここつてこんなに敷地ありましたっけ？」

「ああ、敷地はあつたよ。ただ他の人に貸してただけだよ。無償でね。大きさは三倍近くにはなるかな、これで何人も住むことが出来るぞ」

「それはそうですけど、何かと問題があるんじゃない？」

「そのあたりは問題ない。私が何とかしたよ、それに私は君を信じているのでな」

「どつしてそこまで？」

「無論あいつの息子だからさ。君の人柄も良いしね」

「そうですか…」

そんな風に言われては何も言うことがなくなってしまう。とりあ

えず頭を下げて荷物運びに加わった。

そして荷物を運び終わると春助たちは足早に去っていった。

* * *

「でもこんだけ広げりゃ一人一部屋でいけますなー」と壮汰が言った。

孝樹はハツとなった。そうだ、そうだった。もしかしたらこれで俺の部屋は解放されるんじゃないのか、と。

しかしそこで考え直す。

そもそもあいつが俺の部屋に住み着いた理由って“部屋が片付けられないから”じゃん。

それって結局のところ部屋が増えても同じことじゃんか、と冷静に落ち込み始める。

そうだ、紗美と一緒に部屋じゃん。なら問題ないな、と考えまた考え直した。

だめだ、部屋が片付いても、布団の上が片付いてねーよ。

さつきより一層心が沈んでいく。その時だった、

「どうしたんだ？孝樹。せっかく広くなったのに」と壮汰が不思議そうに聞いた。

「いや、現実って厳しいんだなあ」と

「まあ現実だからのう。しかしこの家はホント賑やかだよな」

「ああ、広くなって何かと良くなったし、家具も新しくしてもらったからな」

その時だった。リビングから優華がやって来た。

「いつまでも話し込んでないで早く片付けたら？」

そう言っただけでリビングに引き返していった。二人は頷き合っ
て荷物を持つと孝樹の先導で壮汰の部屋に向かった。

ちなみに春助の配慮で家の内側の構造は元のまま、部屋の数が
増えたり、リビングが少し広がったりしただけだ。

壮汰の部屋は二階にある六部屋の内の一つであった。壮汰の部屋
は階段から見て左側中央の部屋である。

部屋の前に着くと、「3」と書かれた木の札が掛けてあった。

「なん…だと、この俺が三番だと…」何故か驚いている。

「なんでそんなに驚いてんだよ」さすがの孝樹も不思議に思う。

「だって…1番が良かったもんよー、やっぱり1番だろー」

「1番は俺の部屋だ。んで2番が優華と紗美の部屋。だからお前は
3番だ」

「ちょっと待てよ、んじゃ俺も孝樹の部屋に入れてくれよ」

「それが無理なんだよ、だって俺の部屋には優華いるし」

「…何でだよっ！さっきは2番にいたじゃんかよっ！何で二部屋
にまたがってたんだよ！おかすィーだろ！」

「ちげーよ、2番に荷物があって何故か本体がこっちに来てんの」

「それもおかすイーよ！何で本体と荷物を別々の部屋にしてんだよっ！こんだけ広げりゃ十分収まるだろー」

「収まるけど、あいつの場合片付かなくて収まんねーんだよ」

「納得いく説明ですよっ！チクシヨ！……てか何で冷静！？おかすイーよ！」

「うーん、慣れだよ」

その言葉を聞いた瞬間、壮汰の目が点になる。
慣れかー、慣れって偉大だなー、と彼は呟いた。

「とりあえずそついう事だから3番な」

「ああ、俺、3番で良いや」

そして3番の部屋に荷物を入れた。二人部屋なのだが適当に入れただけなので床一杯に荷物が散乱していた。荷物を部屋に運び終えた二人はリビングに下りていった。

中に入ると二人はテレビを見て笑っていた。不意に優華が振り返って、

「孝樹、お腹空いたわ。ご飯作りなさいよ」と言った。

孝樹は時計を見上げた。もうすぐで正午になる。孝樹は壮汰をリビングに待たせて台所に向かった。台所に入った孝樹は椅子を引いて座り、携帯電話をポケットから取り出した。そしてアドレス帳からある人物を探す。

探しているとりビングから紗美がやって来た。彼女はこれといっ

て何か言っわけでもなく、孝樹の向の席に座った。しかし何も話さない。

「どうしたんだ？」堪えかねて聞いた。

「どうもしないよ？ただこっちに来ただけ」

「そっか、んじゃちょっと電話するから喋るなよ？」

「りょーかい」

孝樹は先ほどから探していたアドレスを見つけ、そこへ電話を掛ける。

「はいもしもし孝樹どの？どうしたでござるか？」相手が応えた。紗美にも辛うじて聞こえる。

「あ、透？明日流議会を開きたいんだけど、皆に連絡まわしてもらえないかな」

「ええ、構いませぬよ？何時にどちらへ集まるでござるか？」

「そうだな、武術館前に二時頃かな。来れない人には流議会の後で俺から伝えるから無理して来なくていい」

「分かったでござる。では失礼致しまする」

そして孝樹は電話を切った。紗美は少し不思議そうな顔をしている。彼女は疑問に思った事を聞いてみることにした。

「今話してた透ってたあれ？」

「ん？今のはうちの道場に来てる一年生の藤隆透ふじたかとあるだよ。ほら、三年生の剣道部主将いるだろ？あいつの妹だよ」

「へえー、そうなんだ。そう言えば道場って何？」

「父さんが開いてた剣術道場だよ。かなり格式高い流派なんだそう
だ」

「そうなんだ、何て言う流派なの？」

「『村雨龍碧流』。何か中二っぽいよな。それでも歴史は古いらしい。ちなみに俺が十代目なんだぜ？」

「え？十代目なの？と言うことは……すごいよ……！」

そう聞いて、え？そんなに驚くことなの？何か嬉しい、と孝樹は心の中でガツポーズを決め込む。そして二人はその話に区切りをつけて昼ごはんの支度に取り掛かった。

料理を作り終えてリビングにいる二人を孝樹は呼んだ。壮汰は普通に、おっ美味そうだなー、と言ったが、優華から聞こえたのはお腹の鳴る音、そして、早く食べさせろ、という肉食動物の呻きだった。皆が座ると、

「今日は中華にしてみた。この炒飯は結構な自信作なんだ」と言った。

「確かに。着実に腕を上げてきてるな」

「ホントだね！すっごく美味しいと思うよ」

「まあ、うん、美味しいんじゃないの？」

皆が炒飯を食べながら言った。孝樹は顔がどんどん綻んでしまう。ちなみに炒飯の他には餃子やチンジャオロース、酢豚に何故か唐揚げやサラダもある。サラダは恐らく中華ではない気もするが。

四人は結構ゆっくりと雑談も交えて昼ごはんを堪能した。お皿を綺麗に空にして一団楽。そして孝樹と紗美は四人分の皿を重ねて片付ける。

一方壮汰と優華はすぐにリビングへと戻っていった。それを目で追いながら孝樹は時計を見た。一時を少し過ぎていた。孝樹は食器を流し台に入れると紗美に、

「ごめん、俺ちょっと出掛けるからこのままにしといてくれるか？」
と言った。

「分かった。頑張ってるね、十代目っ」
にっこりと最高の美を顔に映し出して孝樹に言った。

「あっああ、でもその呼び方は止めてくれ」
そう言って孝樹は家を後にした。

孝樹の向かう武術館は彼の家とそれ程距離はない。長く見積もっても1キロ程だろう。三十分も歩けば十分だ。そこに向かい歩いていくと、呼び止められた。振り返ると透であった。

「お久しぶりにございます、孝樹どの」少し息を切らせて言った。

「おう、久しぶり。元気にしたか？じゃじゃ馬」孝樹は自分より頭一個半ほど下にある小さな頭を軽く撫でて言った。

「止めてくだされ孝樹どの。私ももう高校生になるのでござるよー」と彼女はそれを必死に振りほどこうとする。

「俺から言わせりやまだまだだ。そう言えば先輩は？」手を止めて普通に並んで歩きながら聞いた。

「兄様でしたら先に行っただござるよ？」と透は答えた。

すると彼は軽く空を仰ぎ、その口からは笑みが溢れ、

「やる気満々だな、先輩は。でも残念だけど今日はとりあえず話し合いだけだから先輩悄気るかも」

「気にする必要はないでござるよ。兄様は孝樹どのを深く親交しておられますから」

孝樹の方を見上げて純真無垢な表情で笑う。それを見て孝樹は思わずドキッとしてしまった。

しかしそこで孝樹はそれを気づかれないよう必死に冷静さを取り戻そうとした。そうしているといつの間にか武術館に着いていた。すると集団の中心にいた青年が孝樹たちの方へやって来て、

「お久しう御座います、孝樹殿」とちよつと低めの声で言った。

「お久しぶりです、雪司先輩」孝樹は軽きお辞儀をした。

「兄様早かったでございますな」今度は透が雪司の隣に並んで、彼を見上げて言った。

「まーな、久々で楽しみだったのな。さあ孝樹殿、こちらへ」

そう言っつて雪司は孝樹を武術館の入り口、皆が見渡せる場所へ案内した。孝樹は案内された場所に立ち、皆をしっかりと見渡して、

「まず初めに言わなければいけない事があるんだ」

孝樹のその言葉に皆は少しざわつく。しかし孝樹の次の言葉が始まるとまた綺麗に静まりかえった。

「実は二ヶ月くらい前に俺の両親が交通事故で他界してしまった。その事で今後この流派をどうしようかって話なんだけど……」

凄く気不味い空気が流れ始める。皆、その衝撃的な話と悲しみで何も出来ずにいた。そんな中、冷静な雪司は進んで孝樹の隣に並び立った。

「皆、師範がお亡くなりになった事は悲しい事だ。だが、少し考えてみてくれ、俺達にはまだ九代目嫡男であらせられる孝樹殿がおりれる。起きてしまった事をいつまでも嘆くよりもこれからの事を考えていかなければいけないと思う」と力強く言った。

「そうでござるよ。ここで村雨龍碧流を途絶えさせて良いでござるか？皆師範の為に続けるべきでござらんか？」

その言葉を聞いた瞬間、それまで静まりかえっていた皆が一気に

気持ちを高めて、そつだそつだ、と囁き始めていく。

「なればする事は一つ。新たな師範を立てる事だ。そこでだが俺としては当然彼を推薦する」

そつ言つて雪司は隣に立つ孝樹の肩に手を置いて皆を見た。すると一同も同じ意見と言わんばかりに拍手をし始めた。

「ちよつと待つてくれ。本当に俺なんかで良いのか？俺みたいな未熟者で」と孝樹は言つが、

「もちろんでござるよ。この中で一番励み、一番強い孝樹どのだからこそ皆は選ぶでござる」

孝樹はそれを聞き、皆を見渡す。皆の顔には誰一人としてその事を不満に思うものはいない。皆が孝樹を認めている証拠だ。

「分かりました。それでは師範には俺がなりたいと思う。でも今まで通り接してくればそれで良い」と孝樹は言った。

すると皆は今まで以上に真剣な赴きになって、「はい」と言つて一礼した。

「それじゃ…次に道場開く日時が決まったら追つて連絡します。では解散」と孝樹は言った。

そつして皆は歸つて行つたが、その場にはまだ数名が残っていた。それは孝樹、雪司、透、そして他に四人残っていた。

彼らはゆっくりと孝樹たち三人のもとにやつて来た。その中の一人が話し始めた。

「孝樹さん、一つ質問してもよろしいでありますか？」

「ああ、何だ？北条さん」

「私たちは今後の方針を知りたいのであります」

「方針は父さんの時を変えるつもりはない。変えるとしてもどうしていいか分かんないしな」

「そうでありますか、それならば良いのであります。では私たちは失礼するであります」

そう北条が言つと他の三人は頭を下げて歩いていった。北条を残して……

「えええええ、私置いてかれるでありますかー」と置いて行かれた北条は慌てて三人を追い掛ける。

「何だろう、北条さん見てるとホント可哀想に思えてくる」

「同感でござる。あの四人の中では一番リーダー格っぽいでござるのじ」

「まあ良いではないか、俺達も帰るとしよう」

「兄様つて二重人格でござるか？武術系にはすごく熱を入れるでござるのに、他の事には全く入れませぬ」

「何故かあのようなものには力が入ってしまうのだ」

「そうですね、何か入ってしまうんだよ」

「そう言うものでござるかー」

そう言っつて三人は太陽が照りつけ始める六月の青空の下、家に向かって歩き始める。

一方その頃、北条は三人に追いついていた。

「ひどいでありますよ」彼女は軽く息を切らせて言う。

「すまんかったのう、これは好機と思つて逃げてしまつたき」三人の中で左に立つ茶髪の青年が言つた。

「仕方ないやろ？何ちゅーてもお前いじられキャラなんやし」今度は右に立つ金髪の男が言つた。

「いじられキャラになつた覚えはないであります、東山さん」北条は目に涙を浮かべながら言つた。

「いやいや、お前さんは完全にいじられキャラだきー」と茶髪の男が東山の味方をする。

「南雲さんまで、東山さんの味方するでありますか！？」より一層涙目になる。そして三人はそこでもう一人の男、黒髪の彼を見た。

「……………」

彼は無言のまま立っている。業を煮やした東山が大声で叫んだ。

「何でなにも喋らんのか!?何か喋らんかい、われー」

「すまん、俺は話すの苦手だから」それだけ言って彼、西谷は歩き出す。彼は足が体の大きさの割に結構早い。

他の三人もその早さに何とか追いつく。ちなみに北条は銀髪で、彼らは皆地毛である。

四人は人通りの多い駅前を歩く。目指すはいつも溜まり場としてあるファミレスだ。しばらく歩いているとそのファミレスに着いた。

「相変わらずやなー、この店は」と東山が言うと、

「普通のお店でありますから」と冷静に北条が言った。

その間に南雲と西谷はファミレスの中に入っていった。そしてさつさと席に案内されていった。

まだ外にいた北条と東山も慌てて二人の所に走っていく。

「ちょっと待ちーな、何置いてっとなねん!放置プレイなんぞ興味ないで、わいは!」

「そうですよ!東山さんはともかく、私まで置いて行かなくてもいいでありますよ!」

「いや、だつてのう、何か付き合っの疲れたき。それに腹も空いてたし」悪びれる様子もなく、たんとんと述べる。

東山と北条は大きく溜め息をもらした。二人は同じ事を考えてい

た。“自分の存在って一体”と。

二人の目は立ちながら遠くの方を見続けていた。するとそこへウエイトレスがやって来てしまった。

「まあお前達、座れ」と西谷は二人が座れるよう、南雲にも目配せして席を詰めた。

北条たち二人は黙って席に座ると水を一口飲んだ。ウエイトレスもやっと終わったという顔をして、御注文は御決まりでしょうか、と尋ねた。

「わしゃ和食御膳ぜよ」

「わいはハンバーグ定食と別で大ライスな、後マヨネーズ頼むわ」

「俺はカルボナーラとミックスピザ、それからお子様セット」

「私はチョコレートパフェとバニラアイス、チーズケーキにりんごのタルトであります」

四人が注文し終わるとウエイトレスは厨房に戻っていった。その後ろ姿を見て南雲が話し始めた。

「わしゃ思うんだがのう、あのウエイトレスは間違いなく東山の事を変わった人だと思っとるぜよ」

「なんでやねん！わいは何も変な事ゆーとらんで？」

「…マヨネーズ…」

「そつそんなら西谷のお子様セットでどないやねん！もう高三やぞ
！」

「確かに高校三年生でお子様セットは正直ないであります」

「…むむ…デザート…」

「そうじゃそうじゃ、おんしゃもデザートばかり頼んどるき、十分
変わつとるぜよ」

「なつ、女の子は甘い物が好きなのであります。南雲さんだって
……普通であります」

「はっ！確かに普通や。めちやくちや普通やん」

「…普通だ…」

その時、先程のウエイトレスと初めて見るウエイターが四人の注
文した料理を次々に運んできた。机一杯に料理が並んでいく。それ
ぞれ個性的である。

東山の前にはかなりの大きさの熱々のハンバーグと小ライスにサ
ラダ、そして別途で注文した大ライスが並ぶ。そして今、彼の右手
にはマヨネーズがある。ちゃんとカロリーは半分のものだ。

西谷の前にはイタリアンの有名どころのカルボナーラとミックス
ピザが並ぶ。がしかしその内側にはおそらく子どもは皆大好きなお
子様セットが堂々と鎮座している。ライスの上には日本国旗が立っ
ている。

北条の前には色とりどりの甘いスイーツがいくつか並んでいる。

ここだけは気のせいか冷気をととても帯びている気がする。

それに対し南雲の前にあるもの、それはごく一般的な御膳。これといった特徴もなにもない御膳であった。

「何やそれは！？普通すぎるやろ！お前には個性つちゆうもんがないんか！」

「食い物は普通の人間は普通の物じゃき！それに個性ならあるぜよ！」

「その話し方でありますか？でも確かその話し方は癖とかではなく、カツコイイから使ってるだけでありますよね？」

「…その通りだ…」

「な…なな…何でそういう事言うかな！結構気にしてんのに…」

「確かあれやろ？『クールな二枚目』設定目指してたんやろ？素質ないんちゃう？」

「ひっ酷くね？俺年上だぜ？せめてもう少し優しく言ってくれよ」

「何言ってるんねん、年上でも腕はわいの方が上やろ？南雲」

「ちょっと待てい！ついに呼び捨てだよ！もはや teme 年上とも思ってるねーだろー！！」

「興奮し過ぎでありますよ、南雲さん。とりあえず食べるでありますよ」

「ああ、そうじゃな。先に食べるぜよ」

「また訛りよった、ここにおるんはホンマおもしろいヤツばかりや」

「…うむ…」

そして変わり者の四人は黙々と食べ続ける。もちろん東山は小ライスと大ライスに山になるほどマヨネーズをかけているし、西谷は嬉しそうにお子様セットを食べ、北条は頬や鼻にアイスをつけながらとても美味しそうに頬を膨らます。

唯一南雲だけが普通の御膳を普通に食べていた。

「ただいま」孝樹は玄関を開けて中に入った。すると奥の方から走ってくる音がしてくる。

「おかえり孝ちゃん、結構時間掛かったんだね」紗美であった。

「ああ、ちよつと話し込んでな。とりあえずは俺が後を継ぐことで決まったよ」

「えっ！跡を継ぐ？つまり孝ちゃんが一番偉くなったの？スゴいじゃない」

「名目上の師範になっただけで一番偉いわじゃないよ。俺はあくまで皆の代表に選ばれただけだ」

「そっか、まっ良いけどね。さっ行く？」

紗美は靴を脱いだばかりの孝樹の左腕をガシツと掴むと、グイグイと孝樹をリビングへと引っ張っていく。

「二人ともー、やっと孝ちゃん帰ってきたよー」と中に入ると紗美がテレビを見ている二人に言った。

「遅いぞ孝樹、待ちわびたぞ」

「ほんつとぐずなんだから」

二人がソファーに座ったまま振り返り言った。よく見ると机の上には大量のお菓子が置かれ、ほとんどが開封された上に空になっていた。もはや孝樹の口からはため息しか出ない。なぜなら彼が出掛けてからまだ一、二時間程度しか経っていないのにこの荒れ様だからだ。

孝樹は黙って机の上のゴミや床に散らばるお菓子の欠片を片付けていく。三人はその姿をソファーの上から眺めている。

「ちよつと待てやコラアアアア、オメエーら高みの見物してんじやねーよ！汚した張本人だろうが！」

孝樹は三人の行動に堪忍袋の緒が切れて、勢いに任せて人差し指を綺麗に伸ばして怒鳴りつけた。

そうすると、壮汰は、すまんすまんハッハッハッハッ、と手伝い始め、紗美はご褒美何くれるのかなあ、とふざけながらも一応手伝う姿勢を見せる。だが、優華だけはやはり違っていた。

彼女は手伝うどころか、片づける三人をただ見て、全く全く、と呟いている。それを見ていた孝樹は頭に血がのぼってしまい、

「優華も手伝えよ」と言った。

すると優華はギロリと孝樹を睨み付け、

「ずいぶんと偉そうな口きくじゃない」と不敵な笑みを浮かべる。

それを視界の端から見ていた他の二人は、やっちな孝樹（孝ちゃん）、と全く同じ事を考えていた。

そしてその時は日常の風景のように、唐突に、それでいて波乱の空気を漂わせて訪れた。

優華はソファの上に立ち上がり、一度反動をつけて高く跳躍。天井に当たる寸前で方向を変えて弾丸の如く手を挙げ、足を揃えて孝樹の背中目掛けて跳んでいく。

孝樹は片づけに集中し始めていてそれに全く気づいていない。

次の瞬間には、優華の足が見事に孝樹の背中にヒットした。孝樹はそのまま前に飛ばされ、壁に顔を打ち付けた。

ここまでは優華も計算の内だったのだが、これからは全くの計算外だったようだ。まず孝樹を飛ばしたまでは良かったが、自分が完全に地面から離れていることを彼女は忘れていた。

そのため彼女の体は重力に従い落ちていく。そして当然のように床にぶつかつた。しかも顔の方から……

壮汰と紗美は顔を見合わせて、小さくため息をする。二人は思ったのだ、もしかして天然？、と。

「ちょっと大丈夫？顔打つたみたいだけど」倒れたまま起き上がらない優華に紗美が近寄り揺すりながら言った。

壮汰もそれを見て少し心配になってきた。するとそこに飛ばされた孝樹がやって来た。いたる所に傷が出来ている。

「全く、面倒なヤツだな。手伝いはしないし、墓穴は掘るし、まさ

にお嬢様って感じだよな」

「まー、大手企業の娘なんだろう？だったら当然なんじゃないか？」

「確かにそうだけだよ、ちとワガママって言うかさ」

「大目に見てやろうじゃないか、さっ片づけるぞ？」

壮汰は作業を再開した。無論孝樹も片付け始めるが、彼はその前に優華と紗美のもとに行った。孝樹は無言で優華をひっくり返した。すると彼女は完全に目をまわして行動不能となっていた。紗美はどうして良いか分からず、孝樹を見上げている。

「仕方ねーな、部屋に運んどくか」少々面倒臭そうに頭を掻いた。

紗美はそれを聞いて、分かった、とだけ言い孝樹の先導をして優華を孝樹の部屋に運び入れた。

ちなみに孝樹の部屋は春助の配慮で二人用のベッドが置かれていた。他の部屋は一人用のベッドが両側に一つずつ置かれている。そして孝樹はその二人用のベッドにゆっくりと優華を寝かせた。その間紗美は暇そうに部屋の中を見て回っていた。

「意外だよ、孝ちゃんがこんなに綺麗好きとは」色々といじりながら不意に彼女が言った。

「あ？え？そうか？別に普通だと思うけど」

「そんな事ないよ。かなり綺麗にしてる」

その落ち着いた声に孝樹は思わず紗美に視線を向けた。彼女は傾

き始めた陽光をたたえる窓を背にして立っていた。そして彼女はその艶やかな髪を縛る二つのゴムをスツとほどき、長く伸びた髪に空気をふくませる。その姿はまるで地上に舞い降りた美の化身のように美しく、それでいてこの世のものとして確かな存在感を醸し出していた。彼はそんな紗美をじつと見つめてしまふ。

「どしたの？孝ちゃん」紗美が優雅に首を傾げて聞いた。

「いっいや、こうやって見ると紗美って綺麗なんだなー、てさ」彼女の目と合いそうになる度にそらしながら彼は言った。

「まーね、学校じゃ結構モテてるしね。でもそれならその千摩さんだって同じだよ？」

「そうなんだ。確かに改めてみると綺麗な顔してっからな、お前らは」

「あら？そう言う孝ちゃんだってモテてるじゃない」

「俺が？誰に？」

「はあー、鈍感な男は嫌われちゃうよ？」

紗美はそう言う部屋から出ていった。後に残った孝樹は紗美の言った最後の台詞が異様に気になった。孝樹はしばらく考え込んでいたが、答えは全く見つからない。近くで眠っている優華の顔を眺めていても当然見つからない。悩んだ結果、孝樹は考えるのを止めた。ある程度深く考えて出なかったのだからそれ以上考えても恐らくは見つからない。

孝樹は優華に被せた布団を掛け直して部屋を後にした。

下に下りた孝樹は純粹に驚いた。部屋だけでなく廊下なども綺麗になっていた。孝樹がリビングに入っていくと壮汰と紗美はテレビを見ていた。

「遅いぞ？孝樹。遅すぎて一人で片付けてしまった」

「その割には疲労感が全く見られないんだけど」

「こんなことで疲れる僕ではないぞ！それよりも師範になったんだろう？ならば僕と勝負しよう！」

「しても良いけど手加減とかしないぞ？後お前いつから自分のこと僕って呼ぶようになったんだ？」

「今日からさ、何か俺より僕と言った方が頭良さそうだろ？」

「確かに……実際頭良いから別に良いんだけど、何故だろう、バカにされてる気分だわ」

「そんな事はないさ、あくまで僕個人の意見だからね！それよりも早く勝負しよう」

そう言って既にやる気満々の壮汰は準備運動を始めている。孝樹は、ハイハイ、と言って自分の部屋に愛刀の一つ“四月一日”わたぬきを取りに行こうとした。この愛刀は木刀で樹齡千年の御神木から作り出されたものだ。

部屋を出ようとすると視線を感じた。その方向を見ると紗美がこちらを見ているのが目に入った。紗美は目を輝かせて孝樹を見上げ

ていた。

「紗美、勝負見るか？」と孝樹が気を遣って聞くと、

「見ますっ！」と力強く答えた。

そして紗美は玄関に向かった。壮汰は紗美より先に玄関から出て中庭に向かっていた。孝樹はそれを見送り、再び自分の部屋へと歩み始めた。

部屋に入ると部屋中に小さな寝息が響いていた。彼は物音をたてないように忍び足で自分のタンスの前に向かう。彼は両開きの扉の右側を開けた。すると扉の裏側に一本ずつ、木刀と刀が並列で縦向きに縛られていた。孝樹は木刀を縛る紐を解いてそれを取り出した。そして扉を閉めて一息深呼吸をして中庭に向かった。

中庭に出ると向かいでユニフォームに少し手を加えたものを着た壮汰がまた準備運動をしていた。紗美は壮汰と孝樹の間、リビンググからつながっている僅かな場所に腰掛け、こちらを眺めている。

「なあ壮汰、そのユニフォームで俺と勝負するのか？」

「おっと甘く見ないでもらいたいぞ。このユニフォームはただのユニフォームじゃない。対人用戦闘ユニフォームなのだ」

壮汰は後ろにドローンと文字が出そうな自信満々の仁王立ち姿でそれを自慢する。正直自慢されても別にそれすごくないんだけど、というかそれ試合に着て行けるのだろうか、と孝樹は思っていた。すると壮汰はニヤリとして、試合では着ないぞ、と孝樹に言った。

はっ、こっ心読まれた？勘か？でもあのニヤケ様は明らかに心を読んだ奴の顔だ。本当コイツって一体何者なんだよ。実は宇宙人な

んじゃねーの？と刹那に孝樹の頭の中で考えが駆け巡った。

その時待ちくたびれた壮汰が構えて、早くやろう、と言った。我に返った孝樹も木刀を独自の型で構えた。そんな彼を紗美はとても熱い視線で見ている。

一方下で行われている事を全く知らない優華は未だすやすやと寝息をたてていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2622t/>

雨河くん家の恋愛事情

2011年10月19日20時17分発行